

3 南朝瓦総論 (原題：南朝瓦的研究综述)

賀 雲 翱
(南京大学)

A はじめに

南朝の瓦は 1949 年以前に南京で発見され⁽¹⁾、1970 年代には南京市内の清涼山付近、すなわち六朝時代の石頭城でも出土した⁽²⁾。そして 80 年代以降は、江西省の九江⁽³⁾、成都⁽⁴⁾、鎮江⁽⁵⁾、南京⁽⁶⁾、広州⁽⁷⁾、徐州⁽⁸⁾などでも出土している。しかし、これらの資料はいまだその重要性が十分に認識されていない。筆者は 90 年代にこの課題に注目し、1998 年に南京で開催された「六朝文化についての国際学術シンポジウム」において「六朝瓦当の基礎的研究」という論文を発表した⁽⁹⁾。その後も一連の発掘資料の報告と研究論文の発表をおこない⁽¹⁰⁾、同時に、王志高先生も自身の重要な成果を発表している⁽¹¹⁾。

南朝瓦の研究については、研究者の関心を得たとはいえ、筆者もふくめて瓦の製作技術的側面についての研究は未だ不十分である。

2006 年 3 月、筆者は南京において、光栄にも朱岩石氏を筆頭とする日中共同研究「古代東アジアの造瓦技術の変遷と伝播」の一員として、南京の梁蕭偉墓門闕遺跡、鐘山南朝祭壇遺跡、鐘山 2 号寺廟遺跡（南朝から唐代まで）、南朝宋代の三山街「明堂」磚出土地点、南京付近の六朝窯跡などから出土した瓦磚資料を共同で観察した。この共同組織は瓦の拓本を作成した⁽¹²⁾。これらの瓦資料の大多数はこれまで未発表であり、国内外の研究者が利用できるように、以下、本稿では資料紹介と製作技術に関する初歩的な分析をおこなう。

B 鐘山南朝祭壇遺跡の出土瓦

鐘山南朝祭壇遺跡は 1999 年 4 月に発見され、その後、2001 年 3 月まで 2 年近く発掘調査をおこなった。前後して 1 号壇、2 号壇、3 号建築区を発見し、1 号壇の資料についてはすでに略報を発表した⁽¹³⁾。2 号壇、3 号建築区の資料は現在整理中である。今回発表するのは、1 号壇、2 号壇、3 号建物区から出土した資料の一部である。

(i) 軒丸瓦

標本 1 (T901③ : 29) 灰色で外縁が高く、やや軟質。胎土は比較的粗い。外縁は半分欠けており、文様は八弁蓮華文。蓮弁は細身で、中央に稜線がとおる。蓮弁のあいだの間弁の頂部は 3 つに分かれた尖頭の蓮蕾形である。その輪郭はかなり直線的で、間弁の軸も明確である。

中房は突出し、9つの蓮子（1 + 8）をかざる。蓮華と外縁の間には圈線が一周する。瓦当裏面は平坦。丸瓦の接合痕跡が明瞭で、接合部両端には指頭圧痕がある。瓦当径 14.4 cm、外縁幅 1.0 cm、外縁高 0.8 cm、中房径 2.8 cm、厚さ 2.3 cm（附図 1 - 1）。

標本 2（T1206④ : 10） 青灰色の完形で、やや軟質。胎土は比較的細かい。八弁蓮華文で、蓮弁は幅があり、中央に稜線がとおる。間弁は大きなT字形で、輪郭は直線的である。中房はわずかに突出し、蓮子もはっきりしない。蓮弁と外縁の間には圈線があるが、不明瞭である。瓦当裏面は丁寧に調整し、接合痕跡も明確で、ナデつけた痕跡がある。瓦当径 13.8 cm、外縁幅 1.1 cm、外縁高 0.8 cm、中房径 2.9 cm、厚さ 1.9 cm（附図 1 - 2）。

標本 3（T2702③ : 18） 灰色。完形で外縁が高く、全体に粗雑なつくりである。やや軟質で、胎土は比較的粗い。九弁蓮華文で、蓮弁は細身。間弁は、頂部が三叉の尖頭で、輪郭は直線的で垂直に立ちあがる。間弁の軸は不明確である。中房は突出せず、周囲には圈線が一周し、蓮子は8つ（1 + 7）だが、すでに磨耗している。蓮華と外縁の間にも圈線が一周する。瓦当裏面は凹凸があり、接合痕跡は明確でない。瓦当径 14.0 cm、外縁幅 1.0 cm、外縁高 1.1 cm、中房径 3.0 cm、厚さ 2.3 cm（附図 1 - 3）。

標本 4（T2702③ : 31） 青灰色。高い外縁で完形。やや硬質で、胎土も比較的細かい。八弁蓮華文で、蓮弁は幅があり、稜線がとおる。間弁は太く大きなT字形で、輪郭は直線的である。中房はやや突出し、中央がくぼむ。蓮子は7つ（1 + 6）。蓮華と外縁の間には圈線が一周する。瓦当裏面の調整は普通で、接合痕跡が明瞭で接合部両端には指頭圧痕がある。瓦当径 13.5 cm、外縁幅 1.2 cm、外縁高 0.8 cm、中房径 2.7 cm、厚さ 1.9 cm（附図 1 - 4）。

標本 5（T1206④ : 21） 灰色で高い外縁をもつが、外縁の幅は均一ではない。やや軟質で、胎土は比較的粗い。つくりも粗雑である。九弁蓮華文。蓮弁は短く細身で、稜線が通る。間弁の軸は不明瞭で、頂部には三叉の尖頭蓮蕾形があり、その輪郭は弧形である。中房は突出せず、周囲に圈線が一周し、7つの蓮子（1 + 6）をかざる。蓮華文と外縁の間には圈線が一周する。瓦当裏面には丸瓦の接合痕跡が明瞭で接合部両端には指頭圧痕がある。瓦当径 13.0 cm、外縁幅 0.6 ~ 1.0 cm、中房径 2.8 cm、厚さ 2.0 cm（附図 1 - 5）。

標本 6（T3102③ : 7） 灰色で、外縁は半分残存する。やや軟質で、胎土は比較的細かい。九弁蓮華文で、蓮弁は細身。間弁は太く大きなT字形で、その輪郭は直線的である。中房はやや突出し、蓮子は磨耗しているが、7つ（1 + 6）ある。蓮華と外縁の間には圈線が一周する。瓦当裏面の調整は普通で、丸瓦接合痕跡や接合部両端の指頭圧痕がある。瓦当径 13.6 cm、外縁幅 1.1 cm、外縁高 0.6 cm、中房径 3.2 cm、厚さ 2.1 cm（附図 1 - 6）。

標本 7（T309③ : 1） 灰色で、外縁は高い。やや軟質で、胎土は比較的粗い。十二弁蓮華文で、蓮弁は密に配されるが、扁平で短小。蓮弁中央に稜線が通る。蓮弁の周辺には凸線の細かい輪郭線があり、間弁は頂部が3つにわかれる尖頭の蓮蕾形で、三叉の輪郭は弧形を呈する。中房はやや突出し、蓮子の周囲には圈線が二重にめぐり、8つ（1 + 7）の蓮子をかざる。蓮

華と外縁の間には圈線が一周する。瓦当裏面は凹凸があり、丸瓦の接合痕跡や接合部両端の指頭圧痕が残る。瓦当径 14.4 cm、外縁幅 1.3 cm、外縁高 1.0 cm、中房径 3.0 cm、厚さ 2.8 cm（附図 1－7）。

標本 8（T309③：5） 灰色で、外縁は幅広い。つくりは普通で、やや軟質。胎土は比較的粗い。九弁蓮華文。蓮弁は短小で幅がある。間弁は、頂部が三叉をなす尖頭の蓮蕾形で、輪郭は直線的で垂直に立ち上がり、軸は明確である。中房は突出し、蓮子は 8 つ（1＋7）をかざる。蓮華と外縁の間には圈線がない。瓦当裏面は平坦で、接合痕跡や接合部両端の指頭圧痕がある。瓦当径 13.6 cm、外縁幅 1.5 cm、外縁高 0.5 cm、中房径 3.5 cm（附図 1－8）。

（ii）丸 瓦

標本 1（T2701③：1） 灰色の完形品。硬質で、胎土は細かい。無文で玉縁は短く、玉縁の端部は調整して断面半円形におさめる。筒部の曲率は比較的大きい。玉縁と筒部の接合部分には、接合粘土や接合痕跡が残る。長さ 27.6 cm、幅 15.0 cm、玉縁長 3 cm、厚さ 0.8～1.2 cm（附図 2－1）。

標本 2（T1206④：30） 灰色の破片。凸面は無文で、筒部の特徴は基本的に標本 1 と同様である。凹面には布目があり、玉縁部と筒部の接合部には接合粘土の痕跡が明瞭に残る。残存長 15.4 cm、幅 12.4 cm、玉縁長 3.4 cm、厚さ 1 cm（附図 2－2）。

（iii）平 瓦

標本 1（T2904③：8） 灰黄色を呈する破片。比較的硬質で、胎土は細かい。凸面は無文で、広端寄りに 2 条の浅い凹線があり、凹線下端には縦方向のナデの痕跡がある。凹面には、細かい麻の布目が全体に残る。両側面には分割痕跡がある。残存長 13.9 cm、残存幅 13 cm、厚さは瓦の中ほどで 1.2 cm（附図 2－3）。

（iv）鐘山南朝祭壇遺跡出土瓦の特徴

この遺跡から出土した瓦の特徴は以下のとおりである。

- 1 焼成は一般にやや軟質で、色調は黄色がかっている。これは、この地点から出土した瓦の明確な特徴で、建物が「郊壇」であるということと関係するものとする。
- 2 瓦当の外縁はいずれも高く、瓦当面より高く突出している。これは南朝瓦の普遍的な特徴である。蓮華文は八弁か九弁で、一部十二弁がある。蓮弁の形はやや細身で、蓮華文と外縁の間には圈線が一周する。
- 3 瓦当はすべて、范型で作成したのちに外縁を取り付ける。同時に、別に作成した丸瓦と接合する。丸瓦と瓦当外縁の接合部の内側には接合粘土を使用して表面をナデつけ、その両端を指頭で押さえることで、接合を強固にしている。このため、瓦当裏面の丸瓦接合部の両端には、かなり深い指頭圧痕が残る。
- 4 丸瓦の製作技法の特徴は、凸面が無文であることである。これは、南京出土の呉や西晋時期の丸瓦凸面に、縄叩きやほかの叩き痕跡が残るのと大きく異なる。凹面には布目

があり、模骨を使用したことがわかる。布は、製作時に模骨の表面を包み、丸瓦の円筒を作成後、粘土円筒を抜き取るさいに役立つ。丸瓦両側面の凹面側には分割断面があり、円筒を作成後に模骨からはずし、刀状工具で筒の内部から切り込みをいれて2分割したことがわかる。玉縁と筒部はそれぞれ別に作って接合するため、凹面の接合部には接合粘土があり、表面にナデつけられた痕跡が明瞭に残る。

5 平瓦の特徴は、凸面が無文で、一部にナデ痕跡がある。製作の過程で凸面を工具でなでた工程があり、これはその前の叩きの工程とは別である。凹面には布目があり、両側面には分割痕跡がある。その理由は丸瓦と同様である。しかし、「古代東アジアにおける造瓦技術の変遷と伝播に関する研究」の日本人研究者は、南京において瓦を調査した際に、一部の平瓦凹面に糸切りの痕跡を発見した。最近、南



図1 丸瓦凹面の糸切り痕

京市大光路の建設工事現場の南朝時代の層から丸瓦が出土したが、このうち3点の丸瓦の凹面には明確な糸切り痕がみられる(図1)。これは、南朝の時代に粘土板で成形した丸瓦と平瓦が存在したことを示すものである⁽¹⁴⁾。

この遺跡から出土した瓦磚、磁器片などの特徴と文献史料を総合すると、この祭壇遺跡は、南朝宋の孝武帝が大明3年(459)に造営した建康城の「北郊壇」の遺跡で、その使用年代が南朝宋代をこえることはない。したがって、この遺跡から出土した瓦の製作技術は、南朝の早い時期の特徴をそなえていることになる。

C 梁南平王蕭偉墓門闕遺跡の出土資料

梁の南平王蕭偉墓門闕遺跡は2000年10月に研究課題「六朝帝王陵の考古学的調査」に従事していた際に発見され、同年12月に発掘を終了した。関連資料と研究成果はすでに発表している⁽¹⁵⁾。以下の標本資料は、文化財保護部門が2003年に遺跡を埋め戻して遺跡公園にする前にこの遺跡で採集した、未発表資料である。

(i) 軒丸瓦

標本1(XQ:7) 灰色。やや硬質で、胎土は比較的細かい。外縁は高く、八弁蓮華文。蓮弁の輪郭線は剛直で、蓮弁自体は豊満である。間弁は明確で、頂部がY字形を呈し、輪郭は直線的である。Yの中に横線を1本入れる。中房は小ぶりでやや突出し、周囲には圈線が一周して6個の蓮子(1+5)をかざる。蓮弁と外縁の間には圈線が一周する。瓦当裏面は平滑で、調整も丁寧である。丸瓦接合部には接合粘土の痕跡があり、丸瓦接合部の両端に指頭圧痕が残る。瓦当径13.5cm、外縁幅1.2cm、外縁高1.0cm、中房径1.9cm(附図3-2)。

標本 2 (XQ : 8) 灰色。やや硬質で、胎土は比較的細かい。外縁は高く、十弁蓮華文。蓮弁の輪郭線は柔和で、蓮弁自体は細いが、ボリュームがある。間弁は明確で、頂部が三叉形を呈し、その輪郭は弧形を呈する。中房はやや突出し、9 個の蓮子 (1+8) をかざる。蓮弁と外縁の間には圈線が一周する。外縁上には忍冬文をかざるが、部分的に明確でないところがある。瓦当裏面は平滑で、調整も丁寧である。丸瓦の接合部はナデつけられ、接合部の両端には指頭圧痕がある。瓦当径 12.0 cm、外縁幅 0.8~1 cm、外縁高 0.7 cm、中房径 2.4 cm (附図 3-1)。

標本 3 (XQ : 9) 灰色。やや硬質で、胎土は比較的細かい。外縁は高く、八弁蓮華文。蓮弁の輪郭線は柔和で、蓮弁自体は幅があり、豊満である。間弁は不明確で、その頂部は弧線の三角形を呈する。中房はやや突出し、7 個の蓮子 (1+6) をかざる。蓮弁と外縁の間には圈線がない。瓦当裏面は平滑で、調整も丁寧である。丸瓦接合部には接合粘土の痕跡があり、丸瓦接合部の両端には指頭圧痕が残る。時代は南朝中期。瓦当径 12.3 cm、外縁幅 0.8~1.2 cm、外縁高 0.8 cm、中房径 2.4 cm (附図 3-3)。

(ii) 丸 瓦

標本 1 (XQ : 採集 2) 広端部分が残る。青灰色を呈し、比較的硬質で、胎土は細かい。凸面は無文で、玉縁は短く、全体に丁寧に調整され、肩部と玉縁凸面のなす角度は鋭角である。凸面は柔らかな光沢があり、玉縁と筒部の接合痕跡が明瞭である。凹面は凹凸があり、細かい布目が残る。長さ 20.5 cm、幅 14.1 cm、高さ 5.6 cm、玉縁長 3 cm、筒部の厚さ 1.2 cm。

(iii) 平 瓦

標本 1 (XQ : 採集 1) 半分が残存する。青灰色を呈し、比較的硬質で、胎土は細かい。凸面は無文で、広端部には 2 条の横方向の浅い凹線がある。平瓦の凹面中央には縦方向のナデの痕跡がある。広端面は丸みをおびている。両側面には、厚みの半分をこえる切り込みがある。長さ 34 cm、残存幅 15 cm、厚さ 1.1~1.2 cm。

(iv) 梁蕭偉墓門闕遺跡出土瓦の特徴

本遺跡から出土した瓦の特徴は次のとおりである。

- 1 瓦当の焼成は比較的良好である。鐘山壇類建物址から出土した瓦よりも優れている。蓮華文は八弁か十弁。外縁は高く、一部の外縁上には簡略化した忍冬文がある。この種の忍冬文をかざる瓦当は南朝台城宮殿区でも発見されている (図 2)。製作方法は、瓦当を范型で製作し、つぎに瓦当の外縁を付け加え、最後に丸瓦を接合する。接合部の接合粘土はナデつけられ、その両端は指頭で押さえている。



図 2 瓦当外縁に忍冬文を飾る軒丸瓦

- 2 丸瓦と平瓦の製作方法は、鐘山南朝祭壇遺跡

と類似する。しかし、平瓦の凹面には明瞭な縦方向のナデの痕跡があり、これが本遺跡の平瓦の特徴となっている。

梁の南平王蕭偉墓門闕の墓主は死亡年が明確であり、この墓と瓦の年代の上限は、梁の大通4年（532）年を遡ることはない。下限は梁朝が滅亡する前である。したがって、この瓦は南朝中期を代表する特徴を有していることになる。

D 鐘山2号寺廟遺跡の出土資料

鐘山2号寺廟遺跡は1999年11月に発見され、その後4度の試掘調査をおこなった。一部の資料と研究成果はすでに発表している。この遺跡は、南朝時期の著名な寺院、鐘山定林寺である可能性が高いと考える⁽¹⁶⁾。この遺跡は、上から順に、清代、隋唐代、南朝時期の遺構が重複する。遺跡の面積はかなり大きく、出土した瓦も豊富で、とくに南朝から隋唐代の遺構の序列は、南京地区における5世紀から10世紀の蓮華文瓦当の変化を理解するうえで重要な意義を有している。

（ⅰ）軒丸瓦

標本1（1号平台 TG11：13） 灰色で、外縁は少し欠ける。比較的硬質で、胎土は細かい。八弁蓮華文。蓮弁はやや豊満である。間弁は明確で、太く大きなT字形の頂部をもち、その輪郭は直線的である。中房はやや突出し、7つ（1+6）の蓮子をかざる。蓮華と外縁の間には圈線が一周する。瓦当裏面は凹凸があり、調整も粗雑で回転渦文がある。丸瓦接合痕跡は明確で、その両端に指頭圧痕がある。時代は南朝中期。瓦当径13.0 cm、外縁幅0.8～1.1 cm、外縁高0.8 cm、中房径2.7 cm、厚さ2.0 cm（附図4-1）。

標本2（Ⅰ区 T304③：7） 灰色で、外縁は高い。やや軟質で、胎土は比較的粗い。外縁は半分ほど残存する。九弁蓮華文で、作りはかなりよい。蓮弁は細身で、中央には稜線がとじる。間弁は頂部が三叉の蓮蕾形をなし、その輪郭は平らで軸はやや太い。中房はやや突出し、6つ（1+5）の蓮子をかざる。蓮華と外縁の間には圈線が一周する。瓦当裏面は凹凸があり、回転渦文がある。丸瓦接合痕跡は明確で、両端に指頭圧痕が残る。時代は南朝前期。瓦当径13.8 cm、外縁幅1.2 cm、外縁高1.2 cm、中房径2.8 cm、厚さ2.4 cm（附図4-3）。

標本3（Ⅰ区 T305③：15） 青灰色で外縁は高い。硬質で胎土は比較的細かい。八弁蓮華文。蓮弁は細身で、先端は三角形に近い。間弁は、頂部が三叉の蓮蕾形で、その輪郭は直線的である。形はかなり小さく、軸は二重線である。中房はやや突出し、7つ（1+6）の蓮子をかざる。蓮華文と外縁の間には2重の圈線がめぐる。瓦当裏面は凹凸があり、粗雑なつくりである。丸瓦接合痕跡は明確で、両端に指頭圧痕が残る。時代は南朝中～後期。瓦当径12.5 cm、外縁幅1.2～1.4 cm、外縁高0.8 cm、中房径2.5 cm、厚さ2.1 cm（附図4-4）。

標本4（1号平台 TG9：8） 灰色の破片で、外縁は高い。やや軟質で、胎土は比較的粗い。六弁蓮華文だが、三弁のみ残る。蓮弁は幅があり、大きい。蓮弁の先端は内側に入り込み、

切り込みが入る。間弁の頂部は弧線の三角文で、その両角は左右へ伸びて相互に接続する。外縁の横断面は上が狭く、下が広い。瓦当裏面と丸瓦の接合痕跡は不明瞭である。時代は南朝後期。外縁上部幅 1.2 cm、下部幅 1.6 cm、外縁高 1.2 cm (附図 5-3)。

標本 5 (I 区 T405③: 64) 灰色で、外縁は高く、凸線で獣面を表現する。水滴形の両目は斜めに立ち上がって突出し、楕円形の輪郭がある。三角形の高い鼻は上で額に達し、鼻の両脇には斜め方向にのびる枝状の飾りがある。鼻の下部には山字形の鼻孔をもつ。口部の造形は特殊で、左、右、下部は線で縁取りし、上唇は円弧形につくる。大きく開いた口には、三角形の門歯と犬歯があらわになっている。口の両側と下部には、放射状の巻き毛がある。瓦当裏面は凹凸があり、丸瓦接合部の痕跡が明瞭に残る。時代は南朝前期。瓦当径 11.8 cm、外縁幅 1.0 cm、外縁高 0.8 cm、厚さ 2.2 cm (附図 5-5)。

標本 6 (I 区 T405③: 47) 灰色で、外縁は高い。やや軟質。胎土は比較的粗い。十弁蓮華文で、つくりはよい。蓮弁は豊満で、一部の蓮弁中央に稜線がとおる。間弁の頂部は弧線の三叉の蓮蕾形で、その輪郭は直線的である。中房はやや突出し、周囲には圈線が一周する。圈線の外側には放射状の短く細い線がある。蓮子は 9 つ (1+8) をかざる。蓮華文の外側をめぐる圈線はない。瓦当裏面は凹凸があり、丸瓦接合痕跡は明瞭で、両端には指頭圧痕が残る。時代は南朝前期。瓦当径 13.4 cm、外縁幅 1.2 cm、外縁高 0.9 cm、瓦当径 3.3 cm、厚さ 1.6 cm (附図 5-6)。

標本 7 (I 区 T101③: 90) 灰色の破片。やや軟質で、胎土は比較的粗い。九弁蓮華文。蓮弁は細身で扁平である。一部の蓮弁中央には稜線がとおる。間弁は、頂部が三叉の蓮蕾形で、その輪郭は弧形を呈する。中房はやや突出し、6 つ (1+5) の蓮子をかざる。蓮華と外縁の間に圈線が一周する。瓦当裏面は凹凸があり、丸瓦接合痕跡は明確で、指頭圧痕が残る。時代は南朝前期。外縁幅 1.1 cm、外縁高 0.8 cm、中房径 2.4 cm、厚さ 2.4 cm (附図 4-2)。

標本 17 (I 区 T405②: 29) 灰色で、外縁は高く、よく残っている。やや軟質で、胎土は比較的粗い。八弁蓮華文。蓮弁は細身で、蓮弁の周囲には輪郭線が一周する。間弁の軸はとぎれ気味で、頂部は弧線の三角形を呈しその輪郭は直線的である。中房は突出せず、中房の周囲には圈線がめぐり、6 つ (1+5) の蓮子をかざる。蓮華文と外縁の間には圈線が二周し、圈線の間には計 29 の珠文をかざる。瓦当裏面は凹凸があつて、中央部が突出し、回転渦文がある。丸瓦接合痕跡は明確で、両端に指頭圧痕が残る。時代は隋唐。瓦当径 15.8 cm、外縁幅 1.1 cm、外縁高 1.1 cm、中房径 3.5 cm、厚さ 2.6 cm (附図 4-5)。

標本 18 (II 区 ATG1: 6) 青灰色で、外縁は高く、よく残っている。やや軟質で、胎土は比較的粗い。九弁蓮華文。蓮弁の配列は比較的密で、弁は短く豊満である。間弁の軸はとぎれ気味で、頂部は弧線の三角形を呈し、その輪郭は直線的である。中房は突出せず、周囲に圈線が一周して、5 つ (1+4) の蓮子があり、中心蓮子はほかのものより大きい。蓮華文と外縁の間には圈線が一周し、圈線と外縁の間には珠文が配される。瓦当裏面は凹凸があり、回転渦文が

ある。丸瓦接合痕跡は明確で、両端に指頭圧痕が残る。時代は隋唐。瓦当径 14.8 cm、外縁幅 1.3 cm、外縁高 0.8 cm、中房径 1.9 cm、厚さ 2.5 cm（附図 4－6）。

標本 19（Ⅱ区 ATG2：8） 灰色でつくりはよく、外縁は高い。やや硬質で、胎土は比較的細かい。十一弁蓮華文で、蓮弁は細身である。蓮弁の先端は弧線の三角形となり、輪郭は直線的である。中房はやや突出し、周囲には圈線が一周して、16 個（1+5+10）の蓮子がある。蓮華文と外縁の間には圈線がなく、外縁の内側に細かい珠文がめぐり、瓦当裏面は凹凸があり、回転渦文がある。接合痕跡は明確で、両端に指頭圧痕が残る。時代は隋唐。瓦当径 15.6 cm、外縁幅 1.6～2.0 cm、外縁高 0.9 cm、中房径 4.0 cm、厚さ 2.6 cm（附図 5－1）。

標本 20（Ⅰ区 T303②：15） 灰黒色で、外縁は高い。やや軟質。胎土は比較的粗い。八弁蓮華文で、6 弁が残存する。蓮弁は豊満で、蓮弁の周囲には輪郭線が一周する。間弁の軸はとぎれ気味で、頂部は弧線の三角形、その輪郭は直線的である。中房は突出せず、中房の外側に圈線が一周して 7 個（1+6）の蓮子がある。蓮華文と外縁の間には圈線が一周し、圈線の外側には珠文がめぐり、瓦当裏面は凹凸があり回転渦文がある。接合痕跡は明確で、両端に指頭圧痕が残る。時代は隋唐。外縁幅 1.3 cm、外縁高 0.8 cm、中房径 3.8 cm（附図 5－2）。

標本 21（1 号平台 TG5:14） 灰色で外縁は高い。やや軟質。胎土は比較的粗い。八弁蓮華文で、蓮弁は細身である。蓮弁の縁には凸線の輪郭線をもつ。間弁は弧線の三角形で、その輪郭は垂直に立ち上がる。中房は突出し、蓮子 7 つ（1+6）をかざる。蓮弁と外縁の間には圈線がなく珠文が一周する。瓦当裏面は凹凸があり、中央が突出する。丸瓦接合痕跡は明瞭で、両端には指頭圧痕が残る。時代は隋唐。瓦当径 14.4 cm、外縁幅 1.2 cm、外縁高 1.2 cm、瓦当径 3.2 cm、厚さ 2.6 cm（附図 5－4）。

（ii）丸 瓦

標本 1（Ⅰ区 T304③：10） 灰黄色でやや硬質。胎土は細かい。大きさは比較的小さい。玉縁は短く、端部を丸く調整して断面半円形を呈する。筒部の曲率はかなり大きい。凸面は滑らかで光沢があり、凹面には布目がある。玉縁と筒部の接合部凹面は、接合粘土の痕跡が明確である。南朝前～中期。長さ 20.5 cm、幅 11.8 cm、高さ 6.6 cm、玉縁長 2.5 cm、厚さ 1.2 cm。

標本 4（Ⅰ区 T405③：4） 玉縁がすべて欠けている。灰色で、筒部の特徴は標本 1 と同じである。時代は南朝前～中期。筒部の中央に円形に近い釘孔があり、孔の径は約 1 cm。残存長 14 cm、残存幅 12.5 cm、厚さ 1.5 cm。

標本 5（Ⅰ区 T302③：17） 青灰色。比較的重厚で狭端部、広端部は平らに整えられる。筒部の曲率はやや小さく、凸面にはナデの痕跡がある。凹面は布目が残る。玉縁と筒部の接合部はナデ調整により、滑らかである。時代は南朝前～中期。全長 35.6 cm、幅 16 cm、高さ 6.2 cm、玉縁長 5.2 cm、厚さ 2.1 cm。

（iii）平 瓦

標本 2（Ⅰ区 T302③：4） 青灰色で比較的硬質。胎土は細かい。凸面は無文で、広端側に

は1条の横方向の浅いくぼみがあり、中央部には縦方向のナデ痕跡がある。凹面の狭端側には2つ一組の横方向のくぼみ(10個)があり、上部にもいくつかのくぼみが残存する。全体に細かい布目がある。両側面は、瓦の厚みの半分をこえて切り込みが入る。時代は南朝前～中期。残存長30cm、残存幅15cm、厚さ1.1～1.2cm(附図6-5)。

標本4(I区T405③:10) 青灰色で比較的硬質。凸面の広端側に横方向のナデ調整があり、凹面は布目。凹面の広端側には1条の幅をもった線がある。側面には分割痕跡が残る。時代は南朝前～中期。長さ21cm、残存幅17cm、厚さ1.5～1.7cm。

(iv) 軒平瓦

標本1(I区T405②:2) 青灰色を呈し、軟質で胎土も比較的粗い。端面の中央に1条の太い凸線を持ち、その上部には太く短い斜線文がある。端面の上部と平瓦部凹面は連続し、平らである。端面の下部には、波状文を指で捻り出している。平瓦と端面の接合痕跡は明瞭である。時代は隋唐。残存幅19.4cm、高さ3.5cm(附図6-3)。

標本2(I区T203②:5) 青灰色で、基本的特徴は標本1と同様である。時代は隋唐。残存幅13.6cm、高さ4.0cm(附図6-2)。

標本3(1号平台TG11:10) 青灰色で、つくりは粗雑である。端面の中央に1条の太い凸線を持ち、その上部には太く短い斜線文がある。端面の上部と平瓦部凹面は連続し、平らである。端面の下部には、波状文を指で捻り出している。平瓦と端面の接合痕跡は明瞭である。時代は隋唐。残存幅14.5cm、高さ3.5cm(附図6-1)。

標本4(I区T505②:4) 灰色を呈し、軟質で胎土も比較的粗い。つくりは簡単である。端面の中央に1条の太い凸線を持ち、その上部と下部に太く短い斜線文がある。端面の上部は平瓦凹面よりも高く突出する。平瓦と端面の接合痕跡は明瞭である。時代は隋唐。残存幅19.4cm、高さ3.5cm(附図6-4)。

(v) 鐘山2号寺廟遺跡出土瓦の特徴

1 鐘山2号寺廟遺跡出土の軒丸瓦は、蓮華文と獣面文の2つに分類される。蓮華文が多数を占め、唐代の層からは未だ獣面文瓦当が出土していない。

2 南朝時代の蓮華文軒丸瓦の質は、一般にかなり良好である。外縁は高く、蓮華文は六弁、八弁、九弁、十弁がある。瓦当の製作技術および瓦当と丸瓦の接合方法は、鐘山壇類建物遺跡や蕭偉墓門闕遺址から出土した同類の瓦当と類似している。ただし、一部の瓦当の裏面には回転渦文があるのが特徴である。この種の回転渦文は、呉の人面文瓦当に多く見られるが、南朝時期になるとあまり見られなくなる。したがって、これらの南朝時期の瓦当は製作技法にお



図3 珠文をかざる軒丸瓦

いて一定の特徴がある。

- 3 隋唐時代の蓮華文軒丸瓦は、蓮弁の周囲に珠文を多くかざる。珠文をかざる蓮華文瓦当は南朝中、後期には出現している（図3）。中房は一般に突出せず、間弁の軸はとぎれ気味で、ほとんどみえないものもある。頂部の三角形の蓮蕾文だけが残る場合がある。一部の瓦当の裏面には、南朝瓦当と同様の回転渦文があり、瓦当と丸瓦の接合部の痕跡も南朝の特徴をとどめている。これらは、南京地区における南朝から隋唐時代の軒丸瓦と丸瓦の製作技術的系譜を表わすものである。

- 4 南朝の丸・平瓦の製作技法は、上述の2遺跡で出土した丸瓦とほぼ同じである。

- 5 隋唐の地層から出土した軒平瓦は、端面下部に波状文を指ひねりで作るなど、技術の時代的特徴が明らかである。軒平瓦は南朝台城宮殿区でも出土している（図4）。

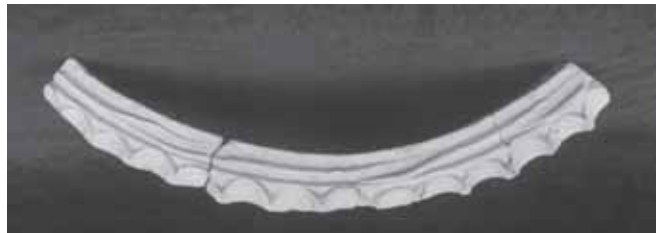


図4 波状文の軒平瓦

E 南京城区三山街「明堂」磚出土地点の資料

南京城区三山街「明堂」磚の出土地点は2006年5月に発見された⁽¹⁷⁾。これらの標本は採集品で、軒丸瓦や銘文のある磚などがある。一部の資料を紹介する。

(i) 軒丸瓦・垂木先瓦

標本1 (NSSJ: 4) 灰色で外縁は高い。やや軟質で、胎土は比較的粗い。瓦当面には複弁蓮華文をかざり、蓮弁は低く平らで、弁端のみ跳ね上がる。蓮弁中央には1条の凸線があり、この線が弁を2分している。そのなかに小蓮弁（子葉）がある。間弁は、軸はないが、蓮弁の頂部間に小さな三角形をつくり、その輪郭は直線的である。中房は欠けている。蓮華文と外縁の間はかなり空いているが、圈線はない。瓦当裏面は凹凸があり、回転渦文がある。裏面と丸瓦の接合部には接合粘土の痕跡があり、その両端には指頭圧痕が残る。時代は南朝前～中期。瓦当径 13.0 cm。外縁の断面は上部が狭く、下部は広い。外縁の上幅 1.0～1.2 cm（下幅 1.3～1.5 cm）、高さ 0.8 cm、厚さ 2.5 cm（附図7-1）。

標本2 (NSSJ: 3) 灰黒色でやや硬質。胎土は比較的細かい。外縁は高く、幅広い。十弁蓮華文で、うち八弁が残る。蓮弁の縁の線はやわらかく、短いが豊満である。蓮弁の中央には稜線をもつ。間弁は明確で、頂部が三叉形をなし、その輪郭は弧線である。中房は若干突出し、径が大きく、蓮子を7つ（1+6）かざる。蓮弁と外縁の間には圈線が一周する。瓦当裏面には凹凸があり、裏面と丸瓦の接合痕跡はナデつけられており、その両端には指頭圧痕が残る。時代は南朝前期。瓦当径 15.6 cm、外縁幅 2 cm、外縁高 1.4 cm、中房径 2.5 cm（附図7-2）。

標本3 (NSSJ: 採 15) 灰色で外縁が高い。やや軟質。胎土は比較的粗い。九弁蓮華文で

ある。蓮弁の輪郭が不明確だが、弁形は豊満で、中央に稜線がある。間弁の線はかなり細く、頂部は三つの尖った蓮蕾形で、輪郭は弧線である。中房はやや突出し、中心がくぼむ。中房には8個の蓮子がまわり、中央の蓮子部分は欠けて、1つの円形の孔があげられている。中房の周囲には細く短い放射状文がある。蓮弁と外縁の間に圈線はない。瓦当裏面は光沢があり、滑らかである。時代は南朝前期。瓦当径 14.7 cm、外縁幅 1.2 cm、外縁高 0.9 cm、中房径 3.4 cm (附図 7-3)。

標本 4 (NSSJ : 5) 灰色で外縁が高く、やや軟質。胎土は比較的粗い。八弁蓮華文で、蓮弁の輪郭は直線的。弁形は扁平で細身である。蓮弁中央には稜線があり、間弁の線は細く、頂部は細長い T 字形で、縁は直線的である。中房はやや突出し、蓮子は不明確だが、7 つ (1 + 6) をかざる。蓮弁と外縁の間の圈線の有無はよくわからない。瓦当裏面には凹凸があり、回転渦文がある。裏面と丸瓦の接合部はナデつけられており、その両端の指頭圧痕は不明瞭である。時代は南朝前期。瓦当径 13.2 cm、外縁幅 1.0~1.2 cm、外縁高 0.8 cm、中房径 3.0 cm (附図 7-4)。

標本 5 (NSSJ : 2) 灰色で外縁は高い。やや軟質で、胎土は比較的粗い。八弁蓮華文。弁形は豊満で、蓮弁中央に稜線がある。間弁の線は明確で、頂部は三つの尖った蓮蕾形をなし、輪郭は弧線である。中房はやや突出して中くぼみとなり、蓮子 8 つ (1 + 7) をかざる。蓮弁と外縁の間には圈線がめぐる。瓦当裏面は滑らかで、丸瓦接合痕跡が明瞭に残る。時代は南朝前期。瓦当径 14.2 cm、外縁幅 1.3 cm、外縁高 1.0 cm、中房径 3.6 cm (附図 8-1)。

標本 6 (NSSJ : 6) 灰色で外縁が高い。やや硬質で、胎土は比較的細かい。八弁蓮華文。蓮弁の輪郭線は直線的であり、弁形は尖り気味で豊満である。間弁の線は明確で、その頂部は太く大きな弧線の三角形をなす。蓮弁頂部と間弁頂部は外縁に近接している。中房はやや突出して中くぼみとなり、蓮子 7 つ (1 + 6) をかざる。蓮弁と外縁の間には圈線がない。瓦当裏面は平滑である。丸瓦の接合痕跡はナデつけられており、両端の指頭圧痕は不明瞭である。時代は南朝前期。瓦当径 13.4 cm、外縁幅 1.0~1.3 cm、外縁高 0.9 cm、中房径 2.5 cm、厚さ 3 cm (附図 8-2)。

標本 7 (NSSJ : 採 13) 灰色で外縁が高い。やや硬質で、胎土は比較的細かい。八弁蓮華文。弁形は豊満で、蓮弁の頂部は鋸状の小さな三角形をなす。間弁は明確で、頂部はやはり鋸状の小さな三角形をなし、輪郭は弧線である。中房はやや突出して中くぼみとなり、蓮子は不明確だが 7 つ (1 + 6) をかざる。蓮弁と外縁の間には圈線がない。瓦当裏面は平らで、浅いケズリ痕跡がある。丸瓦の接合痕跡は明瞭で、両端の指頭圧痕は比較的浅い。時代は南朝前期。瓦当径 11.4 cm、外縁幅 1 cm、外縁高 0.9 cm、中房径 2.1 cm (附図 8-3)。

標本 8 (NSSJ : 採 16) 灰色で外縁が高い。やや硬質で、胎土は比較的細かい。八弁蓮華文。蓮弁は短く扁平で、中央に稜線がとおる。間弁の線は不明確で、頂部は三つの尖った蓮蕾形をなし、その輪郭は弧線である。中房はやや突出して中くぼみとなり、蓮子は不明確だが 7

つ（1＋6）をかざる。蓮弁と外縁の間の圈線ははっきりしない。瓦当裏面は凹凸があり、回転渦文がある。丸瓦の接合痕跡は明瞭で、その両端の指頭圧痕は比較的浅い。時代は南朝前期。瓦当径 9.2 cm、外縁幅 0.8 cm、外縁高 0.7 cm、中房径 2.0 cm（附図 8－4）。

標本 9（南京城区採集：2） 灰色で外縁が高い。やや軟質で胎土は比較的粗い。八弁蓮華文で、うち五弁が残存する。蓮弁は豊満で、中央に稜線がとおる。間弁の軸線はなく、頂部は三つの尖った蓮蕾形をなし、その輪郭は直線的である。中房はやや突出して中くぼみとなり、蓮子は不明確だが 7 つ（1＋6）をかざる。蓮弁と外縁の間の圈線は明確でない。瓦当裏面は滑らかで、丸瓦の接合部分は接合粘土の痕跡が明確で、その両端の指頭圧痕が残る。瓦当径 13.2 cm、外縁幅 1.3 cm、外縁高さ 1.1 cm、中房径 2.6 cm。丸瓦部が完全に残り、凸面は無文で玉縁は短く、端部を丸くおさめる。玉縁と筒部の接合部のなす角度は直角に近い。凸面は光沢があり、滑らかである。筒部中央には円形の釘孔が 1 つあり（直径 1.1 cm）。筒部凸面と瓦当の接合部分は下にくぼむ。玉縁と筒部の接合痕跡は明瞭である。凹面は細かい布目で、凹凸がある。時代は南朝時期。長さ 20.5 cm、幅 12.3 cm、高さ 4.8 cm、玉縁長 2.5 cm、筒部の厚さ 1.0～1.8 cm（附図 6－6）。

（ii）南京城区三山街「明堂」磚出土地点の瓦の特徴

- 1 この地点から出土した縄叩きをもつ磚の小口面には「大明三年明堂壁」の 6 字が押印されている（附図 8－5・6）。このことは、この一帯が『宋書』や『南史』等の史書にあらわれる南朝宋の孝武帝、大明三年（459）創建の「明堂」であることを示している。
- 2 複弁蓮華文軒丸瓦が、少数ではあるが出現している。この種の複弁蓮華文による瓦当装飾は、おもに北魏の平城や洛陽で流行したと見られていた。ただ、南朝の複弁蓮華文瓦当は、北朝の蓮華文瓦当とは一定の違いがある。たとえば外縁が高く狭く、瓦当面が外縁より低い、北朝のものは低い外縁で幅が広く、瓦当面は外縁より高い。北朝の複弁蓮華文は彫刻的要素が比較的つよい。
- 3 多くの瓦当裏面には回転渦文があり、鐘山 2 号寺廟遺址出土の一部の南朝瓦当の製作技術と類似している。
- 4 丸瓦の技術的特徴および丸瓦と瓦当の接合技術は、鐘山南朝祭壇遺跡などから出土した同類の瓦の特徴と類似している。

F 南京付近の安徽省某窯址出土の資料

六朝瓦当の研究の過程で、我々はつねにこれらの瓦当の焼成場所を探し出したいと考えていたが、1997 年に、南京南郊の某建築現場で、六朝の窯跡と一部の瓦を発見した。惜しむらくは、我々が現場に到着する前に窯跡はすでにほとんど破壊されていたが、残存していた床面から、平面がほぼ楕円形を呈する饅頭型窯であることが知られ、現場で少量の瓦当標本を採集した。2001 年に広域の踏査をへて、南京からあまり遠くない安徽省内で、ついに比較的大きい古代の

窯跡群を発見した。多くは南朝時代の窯跡遺跡で、一部の窯内にはいまだ灰や瓦当の破片、平瓦や丸瓦などが遺存していた。以下に紹介するのは、調査中に発見した窯跡の前後関係を決める4号窯と6号窯から出土した2点の瓦当である。

標本1 (ADY: W1) 灰色でやや軟質。胎土は比較的粗い。外縁は半分残存している。八弁蓮華文。蓮弁は細く小さく、かつ豊満である。間弁は太く明確で、その頂部はT字形をなし、輪郭は直線的である。T字形の間にある蓮弁の頂部には珠文をかざる。中房は突出せず、周囲には圈線が一周する。蓮子は7個(1+6)をかざる。蓮弁と外縁の間には圈線がない。瓦当裏面は平滑で、つくりもよい。丸瓦接合部分には接合粘土の痕跡があり、その両端には指頭圧痕が残る。時代は南朝中～後期。瓦当径 14.6 cm、外縁幅 1.2～1.7 cm、外縁高 0.4 cm、中房径 3.6 cm、厚さ約 1.6 cm (附図3-4)。

標本2 (ADY: W2) 灰黒色でやや軟質。胎土は比較的粗い。蓮華文だが、瓦当面には二弁の蓮弁しか残存していない。蓮弁は細長い。間弁は太く明確で、その頂部はT字形である。中房は残存せず、蓮弁と外縁の間には圈線がない。瓦当裏面は凹凸があり、つくりも悪い。時代は南朝後期。外縁幅 1.0～1.6 cm、外縁高 0.4 cm (附図3-5)。

以上、2点の瓦当の文様や製作技術などは南京市出土の南朝の瓦当と基本的に一致する。この窯跡は、南朝の都であった建康に隸属する瓦磚焼成工場である可能性が高い。

G おわりに

現在入手できる南朝瓦の資料からみて、南朝の都城の瓦の技術的特徴は、以下のように理解することができる。

- 1 南朝の瓦当はいずれも外縁が高く、瓦当面は外縁より低い。瓦当面は単独の范型で成形され、つぎに外縁を付加する。瓦当裏面と丸瓦の接合部分の内側には接合粘土を附加し、ナデつけている。接合粘土の両端には、つねに深い指頭圧痕が残る。一部の瓦当の裏面には回転渦文があり、この技術的特徴は、呉および西晋時代から受け継がれ、隋唐時代にもみられる。
- 2 南朝の丸瓦の凸面は無文で、つねに工具による縦方向のナデ調整の痕跡がある。これは呉の時代の、凸面に縄叩きをする丸瓦とは明らかに異なる。丸瓦の凹面には一般に布目があり、これは丸瓦の成形時に、布で包んだ模骨を使用していたことを示している。丸瓦側面の分割痕跡から判断すると、一般に内側から切り込みを入れており、切り込みの深さはだいたい瓦の厚みの2分の1ほどである。一部の瓦にみられる製作痕跡から、粘土板による成形法が存在していたと推測される。
- 3 南朝の平瓦における凸面と凹面の特徴および側面の分割痕跡などは、丸瓦と類似しており、製作技術もほぼ一致している。
- 4 南朝時代の瓦当と隋唐時代の瓦当には、製作技術上、明らかな継承関係がある。ただ

し、瓦当の文様には大きな違いがある。

- 5 南朝の時期には、異なる用途の建物に用いる瓦には、一定の差をつける制度があった。すなわち、宮殿、儀礼的建物、陵寢、寺廟などに瓦を用いる際には、一定程度の違いがあり、この種の差異は、細部にわたる技術的特徴をも内包しているはずであり、さらなる研究を期したい。
- 6 南朝の単弁蓮華文を特徴とする「モデル」は、北朝や百済、さらに百済をとおして古代日本などに一定程度の影響を与えていたことを指摘したことがある⁽²⁰⁾。しかし、これは瓦当面の造形的特徴から提出した観点にすぎない。事実はどうなのか、さらに細かな技術の研究により、説得力のある結論を得ることができるはずである。

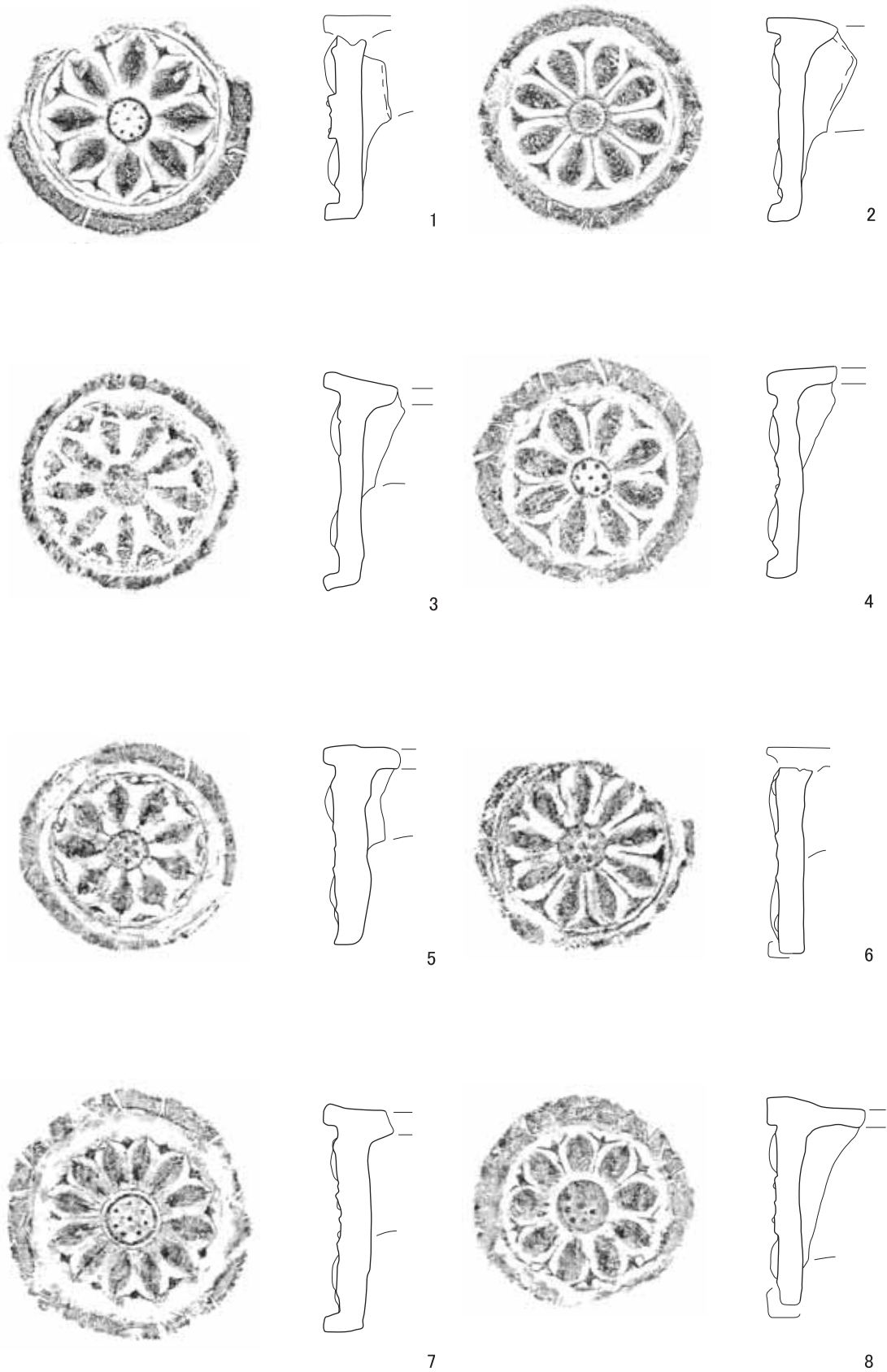
4世紀から6世紀の約300年間に、中国においては秦漢式瓦当（雲文）から隋唐式瓦当（蓮華文）へ変化した。つづいて、東アジア諸国は蓮華文瓦当の図案とその他の瓦類の技法について学ぶとともに、独自の特徴を創作することとなった。これによって、東アジア地域の伝統的な建築文化体系の形成が促進された。この時期、瓦当の使用は宮殿や礼制建築、陵墓、官衙などに限られていたが、しだいに宗教建築にもひろがり、瓦当の使用範囲は大幅に拡大した。この時期の東アジアの瓦の類型、造形、技法などの全面的な研究は、異なる地域や民族の間の文化交流や人の移動などについての理解を深め、さらに多くの歴史の謎を提示するであろう。

本稿は、限られた資料から基礎的な検討をおこなったにすぎない。この場を借りて、多くの方々との交流の機会が得られることを希望するものである。異なる国家や地域の研究者が協力してはじめて、東アジア地域の広汎な意義を有する学術的課題を解決することができるものと信じる。我々が目下関心を抱いている「古代東アジアにおける造瓦技術の変遷と伝播の考古学的研究」という課題は、まさにその一つにほかならない。

註

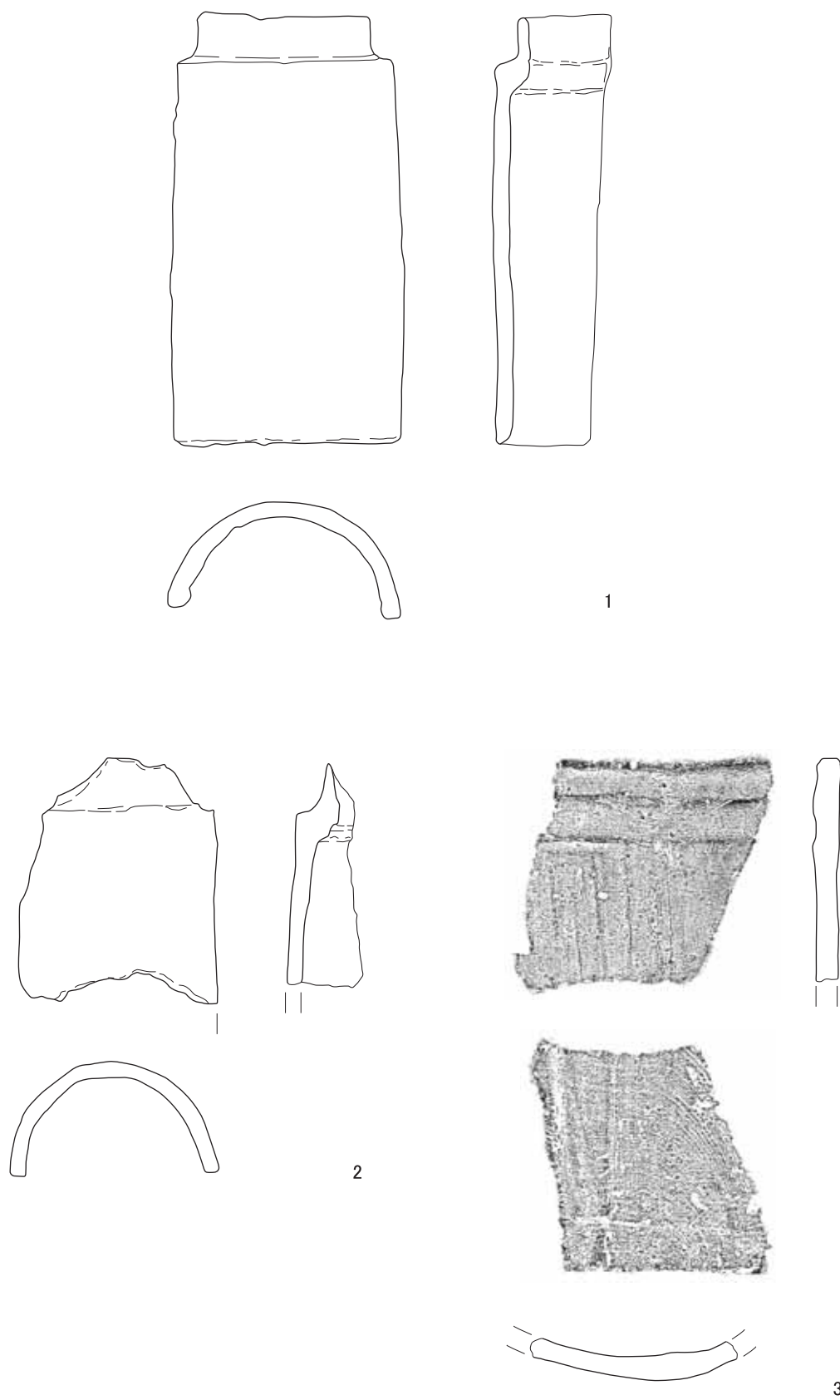
- (1) 村上和夫著、叢蒼・曉陸訳『中国古代瓦当紋様研究』三秦出版社、1996年、第4章「魏晉南北朝から唐代まで」図8に紹介する素弁蓮華文瓦当は、1949年以前に南京市の報恩寺址で出土したもので、東京大学文学部が所蔵している。
- (2) 北京大学考古系所編 講義『魏晉南北朝考古』1974年（内部発行）、38頁に南京清涼山地区出土の南朝時期の蓮華文瓦当と獣面文瓦当が紹介されている。
- (3) 李科友ほか「江西九江県発現六朝尋陽城址」『考古』1987年第7期。この遺跡から南朝の蓮華文瓦当が出土しているが、詳細な資料は未発表である。
- (4) 成都市文物考古工作隊ほか「成都市西安路南朝石刻造像清理簡報」『文物』1998年第11期には、この地点で石刻とともに出土した蓮華文瓦当が1点発表されている。また、張肖馬ほか「成都市商業街南朝石刻造像」『文物』2001年第10期には、この地点から出土した3点の南朝時期の蓮華文瓦当と植物文瓦当が発表されている。
- (5) 劉建国先生は、1990年代に鎮江市街区の調査で南朝時期の蓮華文瓦当を発見している。筆者は、1994年から1995年にかけて鎮江で調査を実施した際に、これらの瓦当を何度か観察した。この資料は、劉建国

- 先生らが整理し、発表されている。鎮江古城考古所「江蘇鎮江市出土の古代瓦当」『考古』2005年第3期、劉建国、潘美雲「論六朝瓦当」『考古』2005年第3期を参照。
- (6) 南京市博物館ほか「江蘇南京市富貴山六朝墓地発掘簡報」『考古』1998年第8期。この墓地から南朝前期の蓮華文瓦当が1点出土した。また、賀雲翱・邵磊ほか「南京首次発現六朝大型壇類建築遺存」『中国文物報』1999年9月8日1版。この文章では、発掘で出土した南朝前期の蓮華文瓦当を紹介した。
- (7) 李竈新「南越国宮署遺址2000年発掘出土瓦当研究」『華南考古』文物出版社、2004年4月。この文章では、2000年に広州で出土した東晋後期から南朝時期の蓮華文瓦当を発表した。
- (8) 劉尊志「徐州出土晋代記事碑及相關問題略考」『中原文物』2004年第2期では、徐城市区の金地商都遺跡から出土した南朝時期の蓮華文と獣面文の瓦当を紹介している。
- (9) 賀雲翱「六朝瓦当初探」『六朝文化国際學術研討會論文摘要』東南文化雜誌社編印、1998年。
- (10) 賀雲翱・邵磊「南京出土南朝椽頭裝飾瓦件」『文物』2001年第8期。南京市文物研究所等（賀雲翱、邵磊執筆）「南京梁蕭偉墓闕発掘簡報」『文物』2002年第7期。賀雲翱「南京出土六朝瓦当初探」『東南文化』2003年第1期。南京文物研究所ほか（賀雲翱執筆）「南京鐘山南朝壇類建築遺存一号壇発掘簡報」『文物』2003年第7期。賀雲翱「南京出土六朝獣面文瓦当再探」『考古与文物』2004年第4期。賀雲翱「南朝都城建康蓮華紋瓦当の変遷及相關問題研究」韓国韓神大学主編『百済漢城期物流系統和対外交流』2004年7月。賀雲翱・邵磊「南京毘盧寺東出土の六朝時代瓷器与瓦当」『東南文化』2004年第6期。賀雲翱「南京鐘山二号寺遺址出土瓦当初探」韓国忠清文化財研究院『東亜考古論壇』創刊号、2005年。賀雲翱・路侃「南京発現南朝明堂磚及其學術意義初探」『東南文化』2006年第4期など。このほか、賀雲翱『六朝瓦当与六朝都城』文物出版社、2005年を参照。
- (11) 王志高・賈維勇「六朝瓦当的發現与初步研究」『東南文化』2004年第4期。
- (12) 本文で使用した拓本はすべて、日中の研究者からなる共同研究「古代東アジアにおける造瓦技術の変遷と伝播に関する研究」のメンバーが南京において調査した際に採拓したもので、拓本作成は日本人研究者が実施した。ここに感謝の意を表したい。
- (13) 南京文物研究所、中山陵園管理局文物処、南京大学歴史系（賀雲翱執筆）「南京鐘山南朝壇類建築遺存一号壇発掘簡報」『文物』2003年第7期。賀雲翱「発現最早的地壇遺存—南京鐘山南朝壇類建築遺存」『中国年度十大考古新發現（2000年卷）』三聯書店、2005年12月。
- (14) 2008年3月26日と27日に北京で開催された「古代東アジアにおける造瓦技術の変遷と伝播に関する国際シンポジウム」において、佐川正敏先生、山崎信二先生は、粘土板成形による製作技法について研究報告をおこなった。筆者も益するところが多く、ここに感謝の意を表したい。
- (15) 南京市文物研究所・南京栖霞区文化局（賀雲翱・邵磊執筆）「南京梁蕭偉墓闕発掘簡報」『文物』2002年第7期。朱光亜・賀雲翱・劉巍「南京梁蕭偉墓闕原状研究」『文物』2003年第5期。
- (16) 賀雲翱「南京鐘山2号寺遺址出土瓦当初探」韓国忠清文化財研究院『東亜考古論壇』創刊号、2005年。賀雲翱「南京鐘山2号寺遺址出土南朝瓦当与南朝上定林關係研究」『考古与文物』2007年第1期。
- (17) 賀雲翱・路侃「南京発現南朝明堂磚及其學術意義初探」『東南文化』2006年第4期。
- (18) 賀雲翱・邵磊「南京出土南朝椽頭裝飾瓦件」『文物』2001年第8期。
- (19) 賀雲翱「六朝椽当的初步研究」『文物』2009年発表予定。
- (20) 賀雲翱「南朝都城建康蓮華紋瓦当の変遷及相關問題研究」韓国韓神大学主編『百済漢城期物流系統和対外交流』2004年7月。このほか、賀雲翱『六朝瓦当与六朝都城』の関連の章を参照。

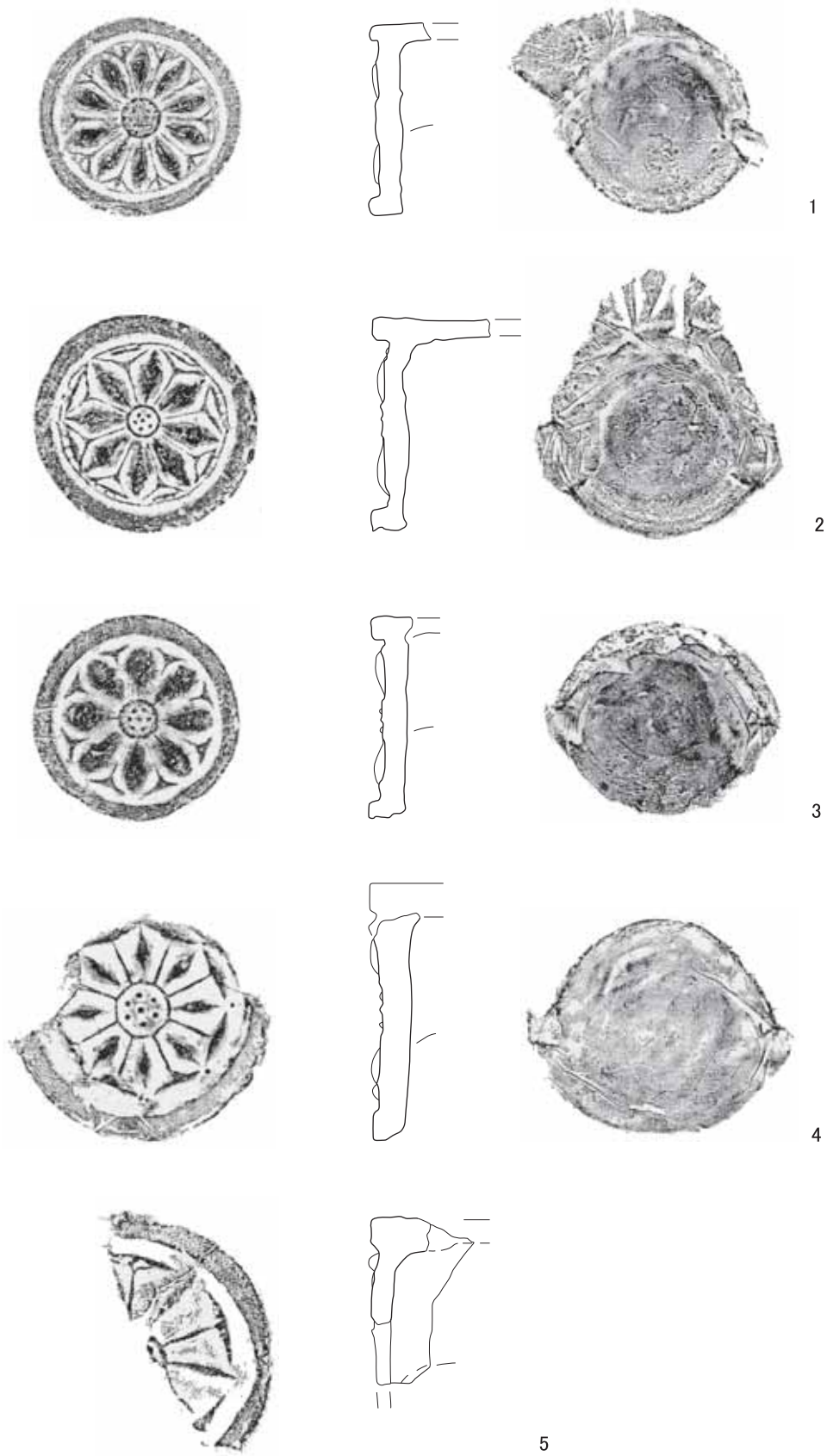


1. T901③:29 2. T1206④:10 3. T2702③:18 4. T2702③:31
5. T1206④:21 6. T3102③:7 7. T309③:1 8. T309③:5

附圖 1 南京鐘山南朝祭壇遺跡出土瓦 (1/4)

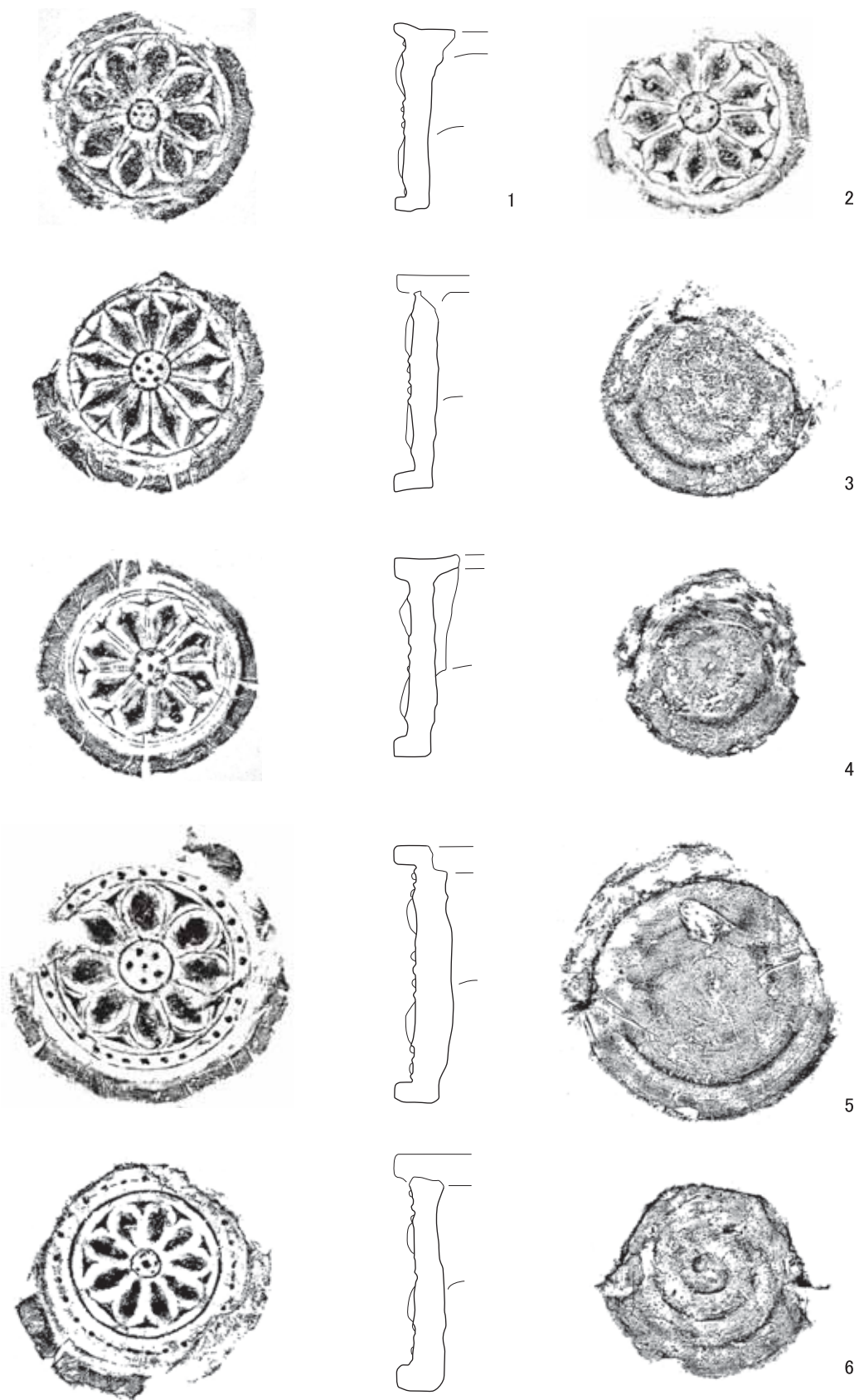


1. T2701③:1 2. T1206:30 3. T2904③:8
 附圖 2 南京鐘山祭壇遺跡出土瓦 (1/4)



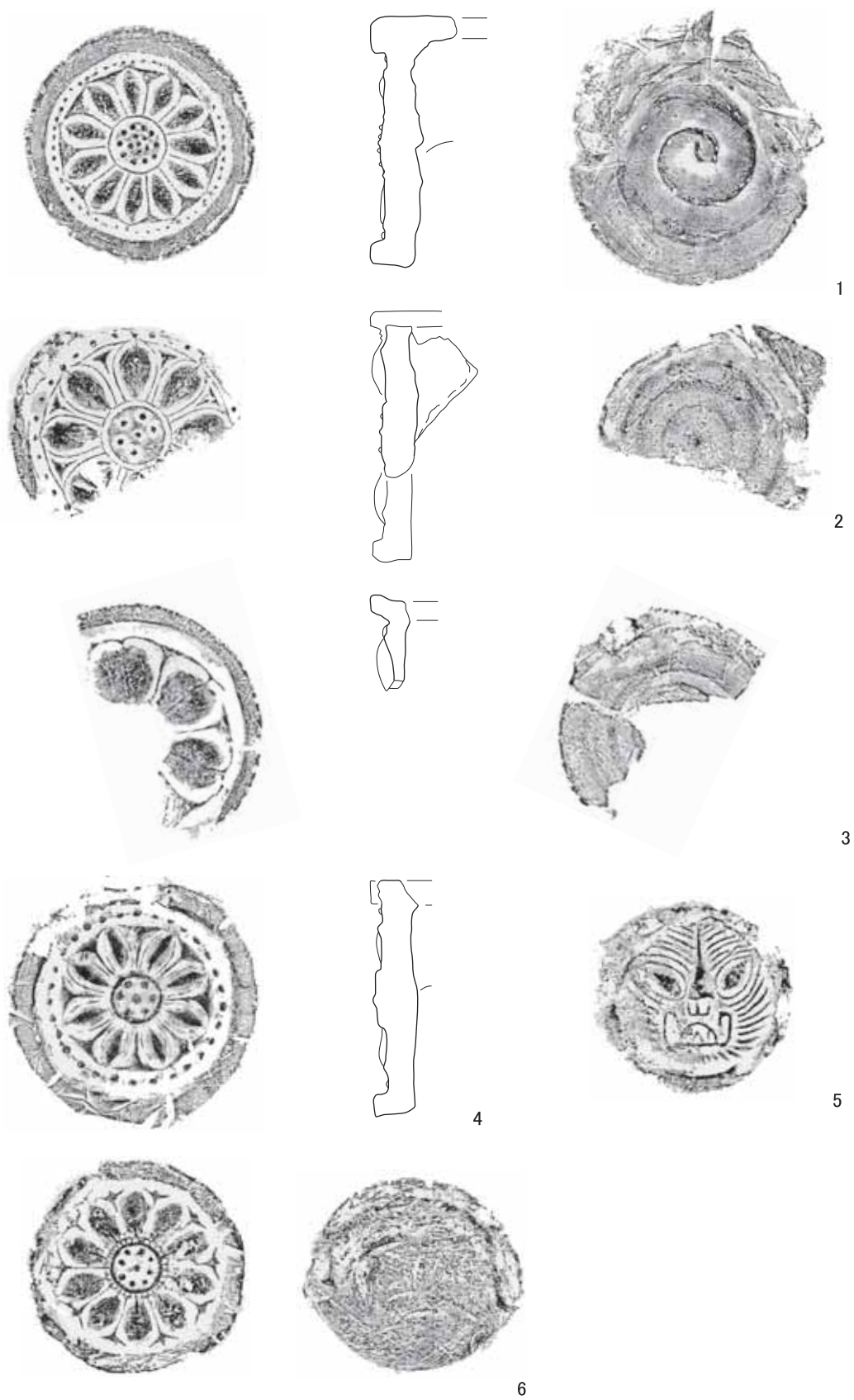
1. XQ:8 2. XQ:7 3. XQ:9 4. ADY:W1 5. ADY:W2

附圖 3 南京梁南平王蕭偉墓門闕遺跡と南京附近安徽省窯址出土瓦 (1/4)



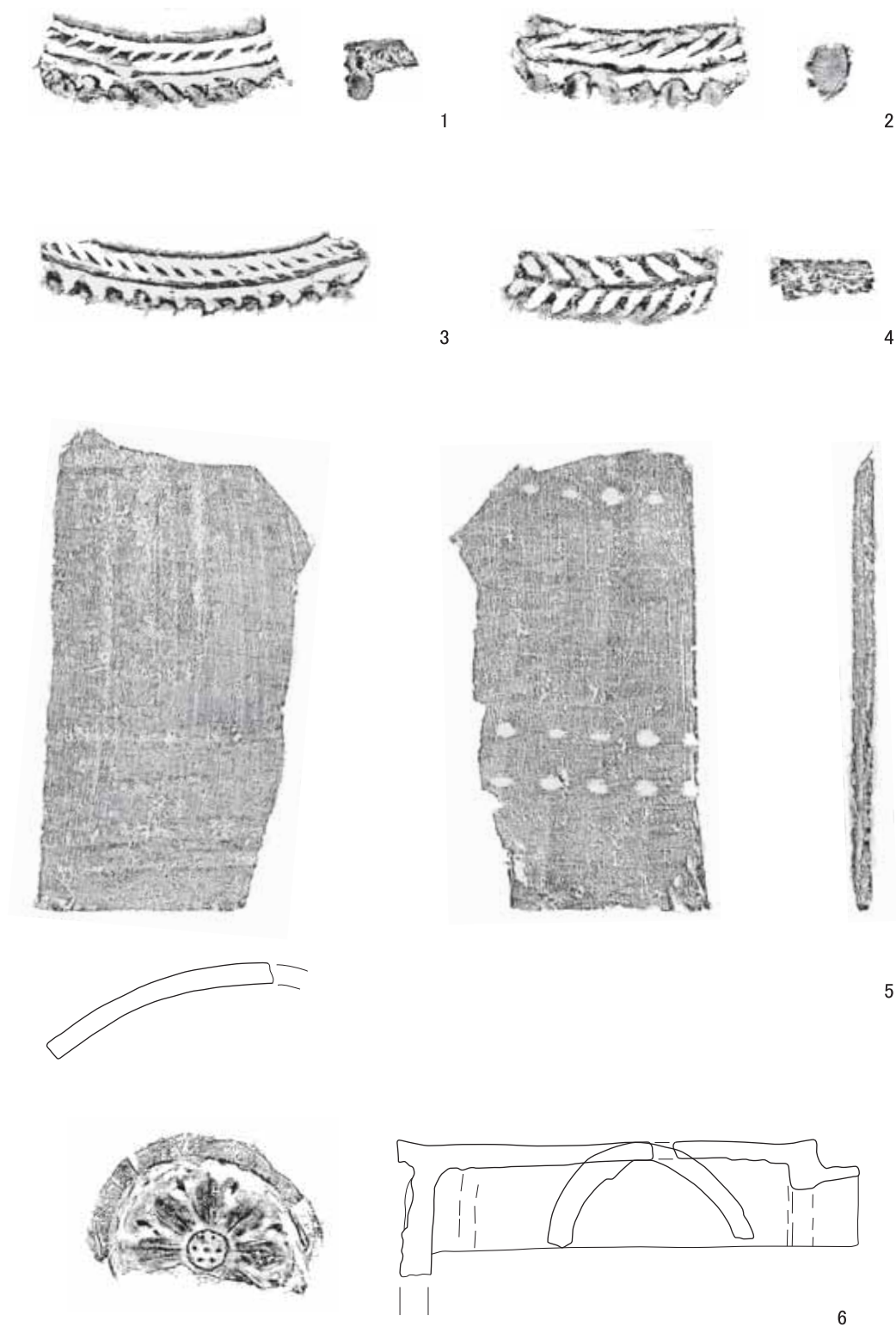
1. 1 号平台 TG11:13 2. I 区 T101③:90 3. I 区 T304③:7
4. I 区 T305③:15 5. I 区 T405②:29 6. II 区 ATG1:6

附图 4 南京鐘山2号寺廟遺跡出土瓦 (1/4)



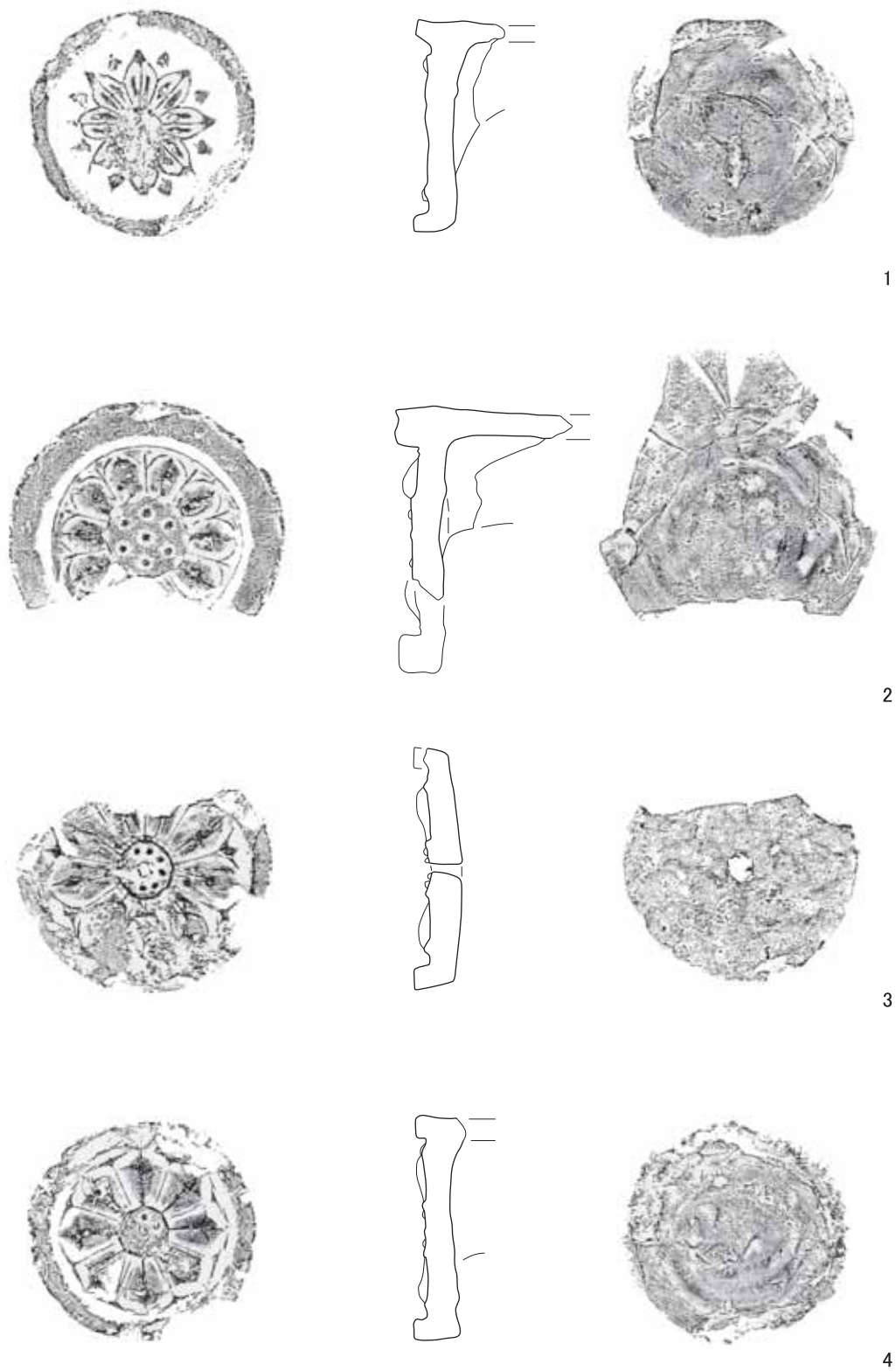
1. II区 ATG2:8 2. I区 T303②:15 3. 1号平台 TG9:8
4. 1号平台 TG5:14 5. I区 T405③:64 6. I区 T405③:47

附图 5 南京鐘山2号寺廟遺跡出土瓦 (1/4)

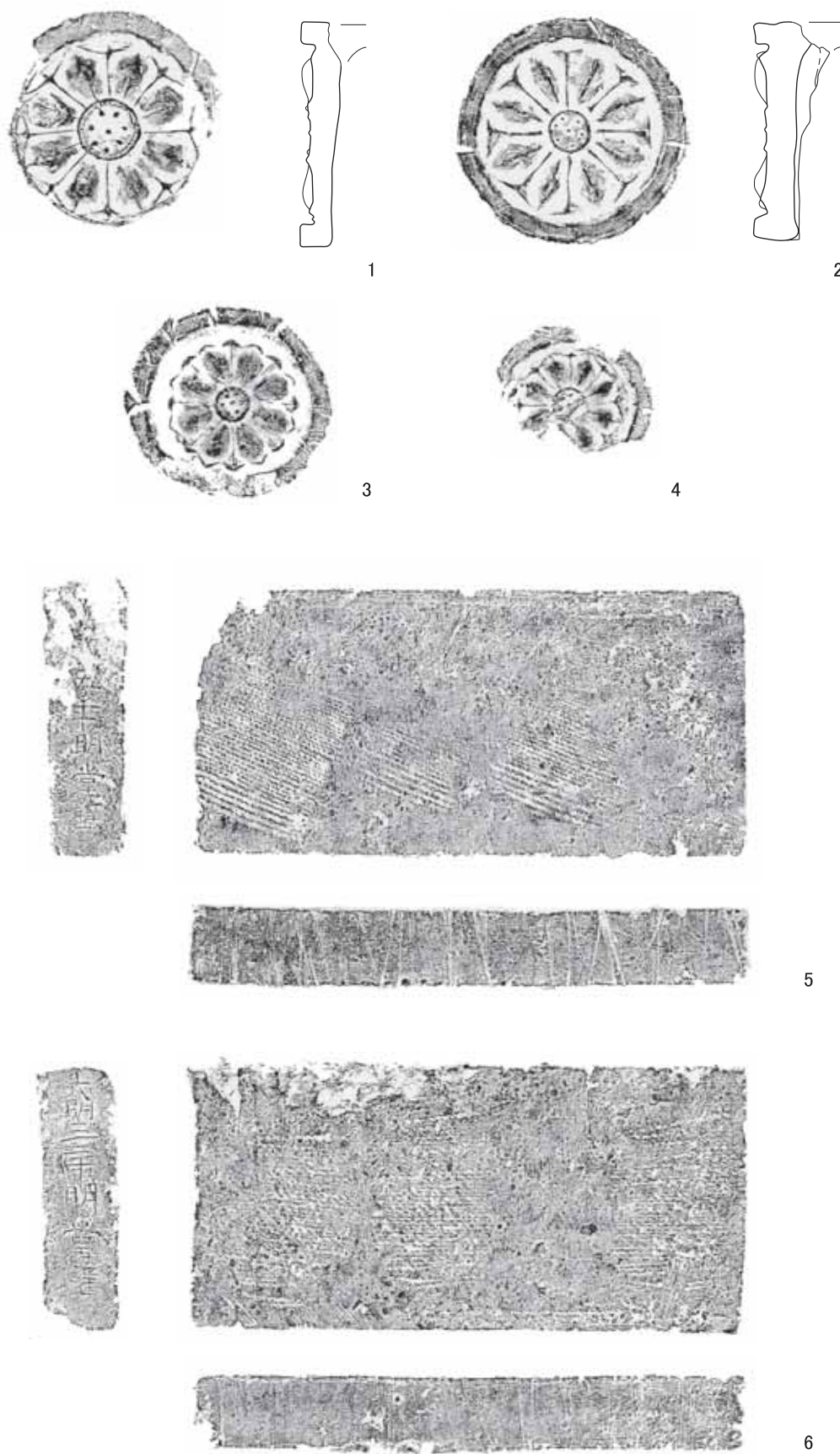


1. 1号平台 TG11:10 2. I区 T203②:5 3. I区 T405②:2
4. I区 T505②:4 5. I区 T302③:4 6. 南京城区採集:2

附図6 南京鐘山2号寺廟遺跡出土瓦および南京市区採集瓦(1/4)



1. NNSJ:4 2. NNSJ:3 3. NNSJ: 探 15 4. NNSJ:5
 附圖 7 南京三山街「明堂」磚地點出土瓦 (1/4)



1. NSSJ:2 2. NSSJ:6 3. NSSJ:採 13 4. NSSJ:採 16 5. NSSJ:1-2 6. NSSJ:1-1

附図 8 南京三山街「明堂」磚地点出土瓦と銘文磚 (1/4)

南朝瓦的研究综述

賀雲翱

(南京大学)

南朝时期的瓦早在 1949 年之前已于南京有所发现⁽¹⁾；20 世纪 70 年代于南京市清凉山附近即六朝时期的石头城区也有出土⁽²⁾；20 世纪 80 年代以后，南朝瓦于江西九江⁽³⁾、成都⁽⁴⁾、镇江⁽⁵⁾、南京⁽⁶⁾、广州⁽⁷⁾、徐州⁽⁸⁾等地皆有出土，但均未引起人们普遍的关注。笔者于 20 世纪 90 年代初有意于这一课题，1998 年在南京召开的“六朝文化国际学术研讨会”上提交了《六朝瓦当初探》的文章⁽⁹⁾。此后陆续发表了一系列主持发掘的考古资料和研究文章⁽¹⁰⁾。与此同时，王志高等先生也发表了他们的重要成果⁽¹¹⁾。

当然，南朝瓦的研究目前虽然得到了众多学者的关心，可是，包括笔者在内，仍未能对它的“技术”问题有深入的分析。

2006 年 3 月，笔者在南京有幸接待了以朱岩石先生为首的由中日学者共同组成的“古代东亚地区造瓦技术变迁与传播”课题组成员，我们共同观摩了南京梁萧伟墓阙遗址、南京钟山南朝坛类建筑遗存、南京钟山二号寺（南朝至唐代）遗址、南京三山街南朝刘宋年间“明堂”砖出土地点、南京附近六朝窑址等出土的一批瓦、砖标本，该课题组还为这批样本做了拓片⁽¹²⁾。这批标本中的大多数过去未曾公开发表过，为了使国内外同道能够方便利用这批材料，本文特予介绍并对其中涉及的一些制作工艺问题略作分析。

一、钟山南朝坛类建筑遗存出土瓦

钟山南朝坛类建筑遗存由笔者于 1999 年 4 月调查发现，此后直到 2001 年 3 月，我们对它做了接近二年的考古发掘，先后发现一号坛、二号坛和三号建筑区，其中一号坛的资料已有简报发表⁽¹³⁾，二号坛、三号建筑区的资料正在整理中。本次公布资料包括了一号坛、二号坛、三号建筑区的部分材料。

(一) 瓦当

1、标本一（T901③:29） 灰陶质。高边轮，质地较疏松，内部颗粒较粗；边轮残半，当面饰 8 瓣莲花，莲瓣形体瘦削，莲瓣中部有出筋现象；莲瓣之间分隔线顶端作三尖莲蕾形，其三尖边缘较平直，莲瓣间分隔线较清晰；中央莲蓬突起，莲蓬上饰 9 颗莲子（中 1 边 8）。莲花与边轮之间饰一道凸弦纹。当背较平整，当背与筒瓦连接处痕迹明显，且两端有手指的按痕。当径 14.4 厘米，边轮宽 1.0、高 0.8 厘米，当心径 2.8 厘米，厚 2.3 厘米。（图一，1）

2、标本二（T1206④:10） 青灰陶质。完好，质地较疏松，内部颗粒较细；当面饰 8 瓣莲花，莲瓣形体稍饱满，莲瓣两端中部有出筋现象；莲瓣之间分隔线顶端作粗大“T”形，其边缘平直。中央莲蓬微突起，莲蓬上莲子模糊不清。莲花与边轮之间凸弦纹若有若无。当背做工较好，

当背与筒瓦连接处痕迹明显，且两端有手指的按痕。当径 13.8 厘米，边轮宽 1.1、高 0.8 厘米，当心径 2.9 厘米，厚 1.9 厘米。（图一，2）

3、标本三（T2702③:18） 灰陶质。完好，高边轮，做工粗糙；质地较疏松，内部颗粒较粗；当面饰 9 瓣莲花，莲瓣形体瘦削；莲瓣之间分隔线顶端作三尖莲蕾形，其三尖边缘较陡直，莲瓣间分隔线若有若无；中央莲蓬不凸起，莲蓬周围有一圈凸弦纹，莲蓬上饰 8 颗莲子（中 1 边 7），但莲子已被磨平。莲花与边轮之间饰一道凸弦纹。当背凹凸不平，当背与筒瓦连接处痕迹不明显。当径 14.0 厘米，边轮宽 1.0、高 1.1 厘米，当心径 3.0 厘米，厚 2.3 厘米。（图一，3）

4、标本四（T2702③:31） 青灰陶质。高边轮，完好，质地较紧密，内部颗粒较细；当面饰 8 瓣莲花，莲瓣形体饱满，莲瓣两端中部有出筋现象；莲瓣之间分隔线顶端作粗大“T”形，其边缘平直。中央莲蓬稍突起，莲蓬中心内凹，莲蓬上饰 7 颗莲子（中 1 边 6）。莲花与边轮之间有一圈凸弦纹。当背做工一般，当背与筒瓦连接处痕迹明显，且两端有手指的按痕。当径 13.5 厘米，边轮宽 1.2、高 0.8 厘米，当心径 2.7 厘米，厚 1.9 厘米。（图一，4）

5、标本五（T1206④:21） 灰陶质。高边轮，边轮稍残，边轮宽度不一，质地较疏松，内部颗粒较粗；做工较粗糙，当面饰 9 瓣莲花，莲瓣形体短小而瘦削，莲瓣中部有出筋现象；莲瓣间分隔线不明显，仅在莲瓣之间顶端作三尖莲蕾形，其三尖边缘呈弧形；中央莲蓬不凸起，在莲蓬周围有一圈凸弦纹，莲蓬上饰 7 颗莲子（中 1 边 6）。莲花与边轮之间饰一道凸弦纹。当背凹凸不平，当背与筒瓦连接处痕迹明显，且两端有手指的按痕。当径 13.0 厘米，边轮宽 0.6-1.0、高 0.6 厘米，当心径 2.8 厘米，厚 2.0 厘米。（图一，5）

6、标本六（T3102③:7） 灰陶质。边轮残半，质地较疏松，内部颗粒较细；当面饰 9 瓣莲花，莲瓣形体瘦削；莲瓣之间分隔线顶端作粗大“T”形，其边缘平直。中央莲蓬微突起，莲蓬上莲子模糊，上饰 7 颗莲子（中 1 边 6）。莲花与边轮之间饰一圈凸弦纹。当背做工一般，当背与筒瓦连接处痕迹明显，且两端有手指的按痕。当径 13.6 厘米，边轮宽 1.1、高 0.6 厘米，当心径 3.2 厘米，厚 2.1 厘米。（图一，6）

7、标本七（T309③:1） 灰陶质。高边轮，边轮稍残，质地较疏松，内部颗粒较粗；当面饰 12 瓣莲花，莲瓣排列较紧密，莲瓣形体扁平而短小，莲瓣中部有出筋现象，莲瓣周边有一道凸起的细轮廓线；莲瓣之间分隔线顶端作三尖莲蕾形，其三尖边缘呈弧形；中央莲蓬稍突起，莲子周围有二圈凸弦纹，莲蓬上饰 8 颗莲子（中 1 边 7）。莲花与边轮之间饰一圈凸弦纹。当背凹凸不平，当背与筒瓦连接处痕迹明显，且两端有手指的按痕。当径 14.4 厘米，边轮宽 1.3、高 1.0 厘米，当心径 3.0 厘米，厚约 2.8 厘米。（图一，7）

8、标本八（T309③:5） 灰陶质。宽边轮，边轮稍残，做工一般；质地较疏松，内部颗粒较粗；当面饰 9 瓣莲花，莲瓣形体短小饱满；莲瓣之间分隔线顶端作三尖莲蕾形，其三尖边缘较陡直，莲瓣间分隔线较清晰；中央莲蓬凸起，莲蓬上饰 8 颗莲子（中 1 边 7）。莲花与边轮之间无凸弦纹。当背较平整，当背与筒瓦连接处痕迹明显，有手指的按痕。当径 13.6 厘米，边轮宽 1.5、高 0.5 厘米，当心径 3.5 厘米。（图一，8）

（二）筒瓦

1、标本一（T2701③:1） 完好。灰陶质，质地紧密，内部颗粒细小。素面，短唇，前端圆润呈半圆形，筒身拱度较大，唇部与筒身连接处（内）附加泥片及粘接痕明显。长 27.6、宽 15.0、高 5.8 厘米，唇长 3、厚 0.8-1.2（靠瓦唇处）厘米。（图二，1）

2、标本二（T1206④:30） 灰陶质。残，表面素面，筒体特征基本同上。瓦身内面印麻布纹，瓦唇与筒身拼接并有附加泥片的痕迹较为明显。残长 15.4、宽 12.4 厘米，唇长 3.4、厚 1 厘米。（图二，2）

（三）板瓦

1、标本一（T2904③:8） 残。灰黄陶质，质地较紧密，内部颗粒细小；表面素面，表面前（宽）端部有二道横向浅凹槽，凹槽下端有纵向刮压痕；瓦身内面通体印有细麻布纹。两侧面有切割痕。通体残长 13.9、残宽 13、厚（瓦身中段）1.2 厘米。（图二，3）

（四）本遗址出土瓦件的特点归纳如下：

1、质地普遍较疏松，颜色偏黄，这是本地点出土瓦当的显著特征，我们认为这与建筑本身是为“郊坛”的性质有关。

2、均为高边轮，即边轮都高于当面，这是南朝瓦当的普遍特点。当面多饰 8 瓣或 9 瓣莲花纹，也有少数为 12 瓣莲花纹。瓣形多较瘦削，莲花与边轮之间有一道凸弦纹。

3、其瓦当制作特点是：皆为先模制成当面，再附加高边轮；同时又先做成筒瓦瓦身，然后将瓦当与筒瓦端部相粘接，在筒瓦端部与边轮粘接处的内面附以泥片，泥片表面被抹平，在泥片左右两端还用手指按压，以进一步加强筒瓦端部与瓦当边轮间的粘接程度，于是在当背两侧形成较深的指压痕。

4、其筒瓦制作特点是：表面（凸面）为素面，这与南京出土东吴、西晋时期筒瓦表面存在拍打绳纹或拍印其它纹饰的风格有较大差异；内面（凹面）一般有麻布纹，说明其有内模，制作时在内模表面包有麻布，做成以后以利瓦身脱模；两侧近内面处有切痕，说明其先做成筒身，再取出内模，并用刀具从筒身内部划切，最后一分为二，成为两片筒瓦；瓦唇与筒身先分开制作，然后再粘接到一起，两者结合部的内面附加有泥片，泥片被磨平，但留有明显的粘连痕。

5、其板瓦制作特点是：表面（凸面）为素面，局部留有刮压痕，说明在制作过程中有在表面用工具加以刮压的工序，这是一种有别于“拍压”工序的工艺；内面（凹面）有麻布纹，两侧面有切割痕，其原因与筒瓦类似现象当为相同。不过，“古代东亚地区造瓦技术变迁与传播”课题组日方专家在南京考察时，发现个别板瓦内面有线切割痕迹。最近，我们在南京大光路一建筑工地南朝地层中获得一批南朝筒瓦，其中有 3 件筒瓦内面局部也有较明显的线切割痕迹（图二，4）。它可能证明在南朝时期，存在“泥板成型”的筒瓦和板瓦^{（14）}。

根据该遗址出土的砖、瓦、瓷片等文物特点，并结合相关文献，我们认为此处坛类建筑遗存是南朝宋孝武帝大明三年（公元 459 年）所建的建康都城“北郊坛”遗存，其延用年代不会超过刘宋年间，因此，该遗址出土的瓦件制作工艺应具备南朝偏早期的时代工艺特点。

二、南朝梁萧伟墓阙遗址出土瓦

梁南平王萧伟墓阙遗存是笔者于2000年10月在主持“六朝帝王陵考古调查”课题时发现，并于当年12月发掘完毕，相关资料和研究成果均已发表⁽¹⁵⁾。后文物保护部门于2003年将出土遗迹填埋，并于其地表建遗址保护公园，本文所述标本资料即是在2003年填埋之前再次于该地点现场采集所得，且还未公开发表。

（一）瓦当

1、标本一（XQ:7） 灰陶质。质地较紧密，颗粒较细；高边轮，当面饰8瓣莲花，莲瓣边缘线条刚直，莲瓣形体饱满；莲瓣之间分隔线较清晰，其顶端作“Y”形，其边缘平直，在Y形内填一横线，横线上出三尖。中央莲蓬形体较小，稍凸起，莲蓬边缘为一圈凸弦纹，莲蓬上饰6颗莲子（中1边5）。莲花与边轮之间饰一道凸弦纹。当背平滑，做工较好，当背与筒瓦连接处有附加泥片痕迹，且两端有手指的按痕。当径13.5厘米，边轮宽1.2、高1.0厘米，当心径1.9厘米。

（图三，2）

2、标本二（XQ:8） 灰陶质。质地较紧密，颗粒较细；高边轮，当面饰10瓣莲花，莲瓣边缘线条柔和，莲瓣形体较瘦且饱满；莲瓣之间分隔线较为清晰，其顶端作三叉形，其边缘稍呈弧形。中央莲蓬略凸起，莲蓬上饰9颗莲子（中1边8）。莲花与边轮之间饰一道凸弦纹。边轮上饰有忍冬纹，但忍冬纹局部较为模糊。当背平滑，做工较好，当背与筒瓦连接处痕迹被抹平，且两端有手指的按痕。当径12.0厘米，边轮宽0.8-1、高0.7厘米，当心径2.4厘米。（图三，1）

3、标本三（XQ:9） 灰陶质。质地较紧密，颗粒较细；高边轮，当面饰8瓣莲花，莲瓣边缘线条柔和，莲瓣形体较为肥大饱满；莲瓣之间分隔线不明显，其顶端作倒弧边三角形。中央莲蓬稍凸起，莲蓬上饰7颗莲子（中1边6）。莲花与边轮之间无弦纹。当背平滑，做工较好，当背与筒瓦连接处有泥片附加痕迹，且两端有手指的按痕。时代为南朝中期。当径12.3厘米，边轮宽0.8-1.2、高0.8厘米，当心径2.4厘米。（图三，3）

（二）筒瓦

1、标本一（XQ:采2） 下部残。青灰陶质，质地较紧密，内部颗粒细小。表面素面，短唇，唇部圆润，唇部与筒瓦连接处（表面）较陡直，表面圆润光滑。唇部与筒身连接处（内）粘接痕迹明显。内面凹凸不平且有细小的麻布纹。长20.5、宽14.1、高5.6厘米，唇长3，筒瓦厚1.2厘米。

（三）板瓦

1、标本一（XQ:采1） 残半。青灰陶质，质地较紧密，内部颗粒细小；素面，表面下（宽）端部有二道横向浅凹槽，板瓦表面中部有纵向刮压痕；瓦体下端面口沿稍圆润，两侧面有超过瓦体厚度一半的切割痕。通体长34、残宽约15、厚1.1-1.2厘米。

（四）本遗址出土瓦件的特点是：

1、瓦当质地较好，明显优于钟山坛类建筑遗存出土瓦件。当面饰8瓣或10瓣莲花；高边轮，有的边轮表面饰有简化的忍冬纹，这种在边轮上装饰忍冬纹的瓦当在南朝台城宫殿区也有发现（图

三, 6)。其制作工艺为先模制当面, 再附加边轮, 最后粘接筒瓦, 瓦当与筒瓦端部粘接处附加泥片并抹平, 在附加泥片的两端有手指按压痕。

2、筒瓦及板瓦的制作工艺与钟山南朝坛类建筑遗存的特点类似, 但板瓦表面有十分明显的纵向刮压痕构成了它的特点。

梁南平王萧伟墓阙的墓主人有明确的卒年, 即该墓阙及其瓦件的年代之上限不会早于梁中大通四年(公元 532 年), 下限也不会晚于梁朝灭亡, 因此这批瓦件应代表了南朝中后期的制作工艺特点。

三、钟山二号寺庙遗址出土瓦

钟山二号寺庙遗址由笔者于 1999 年 11 月田野调查时发现, 后对其做了前后 4 次试掘, 部分资料和研究成果已经发表, 笔者认为, 它极可能就是南朝时期著名的钟山上定林寺遗址⁽¹⁶⁾。这一遗址从上到下有清代、隋唐、南朝三个时代的堆积。遗址占地面积较大, 出土瓦件材料丰富, 特别是从南朝至唐代的遗存序列, 对认识南京地区公元 5 世纪至 10 世纪的莲花纹瓦当之演变有重要意义, 现举例如下:

(一) 瓦当

1、标本一(1 号平台 TG11:13) 边轮稍残。灰陶质。质地较紧密, 颗粒较细; 当面饰 8 瓣莲花, 莲瓣形体稍饱满; 莲瓣之间分隔线顶端作粗大“T”形, 其边缘平直。中央莲蓬稍突起, 莲蓬上饰 7 颗莲子(中 1 边 6)。莲花与边轮之间饰一道凸弦纹。当背凹凸不平, 做工粗糙, 有旋坯纹, 当背与筒瓦连接处痕迹明显, 且两端有手指的按痕。时代为南朝中期。当径 13.0 厘米, 边轮宽 0.8-1.1、高 0.8 厘米, 当心径 2.7 厘米, 厚 2.0 厘米。(图四, 1)

2、标本二(I 区 T304③:7) 灰陶质。高边轮, 质地较疏松, 内部颗粒较粗; 边轮残半, 当面饰 9 瓣莲花, 做工较好, 莲瓣形体瘦削, 个别莲瓣中部有出筋现象; 莲瓣之间分隔线顶端作三尖莲蕾形, 其三尖边缘平直, 莲瓣间分隔线较粗; 中央莲蓬稍突起, 莲蓬上饰 6 颗莲子(中 1 边 5)。莲花与边轮之间饰一道凸弦纹。当背凹凸不平, 有一圈圈旋坯纹, 当背与筒瓦连接处痕迹明显, 且两端有手指的按痕。时代为南朝早期。当径 13.8 厘米, 边轮宽 1.2、高 1.2 厘米, 当心径 2.8 厘米, 厚 2.4 厘米。(图四, 3)

3、标本三(I 区 T305③:15) 青灰陶质。高边轮, 质地较细密, 内部颗粒较细; 当面饰 8 瓣莲花, 莲瓣形体瘦削, 靠边轮的一端似三角形; 莲瓣之间分隔线顶端作三尖莲蕾形, 三尖边缘平直, 其形体较小; 莲瓣间分隔线为双线; 中央莲蓬稍突起, 莲蓬上饰 7 颗莲子(中 1 边 6)。莲花与边轮之间饰二道凸弦纹。当背凹凸不平, 做工粗糙; 当背与筒瓦连接处痕迹明显, 且两端有手指的按痕。时代为南朝中、晚期。当径 12.5 厘米, 边轮宽 1.2-1.4、高 0.8 厘米, 当心径 2.5 厘米, 厚 2.1 厘米。(图四, 4)

4、标本四(1 号平台 TG9:8) 残。灰陶质。高边轮, 质地较疏松, 内部颗粒较粗; 当面原饰 6 瓣莲花, 现剩 3 瓣莲花, 莲瓣形体宽而肥大; 莲瓣尖略向内收缩作切入式, 莲瓣间分隔线顶

端作肥厚倒弧边三角形，三角形底边两角向左右延伸并互相连接；边轮横截面上窄下宽。当背与筒瓦连接处痕迹不明显。时代为南朝晚期。边轮上部宽 1.2 厘米、下部宽 1.6，高 1.2 厘米。（图五，3）

5、标本五（Ⅰ区 T405③:64） 稍残。灰陶质。高边轮。当面用凸线条表现兽面，水滴形双目斜立并凸起，有椭圆形眼眶。正三角形高鼻梁，上直达额部，鼻梁两边饰斜线如树枝状，鼻梁下有“山”字形鼻孔。口部造形奇特，左、右、下部以线条作边框，上唇作圆弧形，张口露三角形门齿和獠牙。口两侧、下部有放射状须毛。当背凹凸不平，当背与筒瓦连接处痕迹明显。时代为南朝早期。当径 11.8 厘米，边轮宽 1.0、高 0.8 厘米，厚 2.2 厘米。（图五，5）

6、标本六（Ⅰ区 T405③:47） 稍残。灰陶质。高边轮，质地较疏松，内部颗粒较粗；当面饰 10 瓣莲花，做工较好，莲瓣形体饱满，个别莲瓣中部有出筋现象；莲瓣之间分隔线顶端作三尖莲蕾形，其三尖边缘平直；中央莲蓬稍突起，莲子周围有一圈凸弦纹，弦纹外有一圈放射状的短细线；莲蓬上饰 9 颗莲子（中 1 边 8）。莲花与边轮之间无凸弦纹。当背凹凸不平，当背与筒瓦连接处痕迹明显，且两端有手指的按痕。时代为南朝早期。当径 13.4 厘米，边轮宽 1.2、高 0.9 厘米，当心径 3.3 厘米，厚约 1.6 厘米。（图五，6）

7、标本七（Ⅰ区 T101③:90） 残。灰陶质。质地较疏松，内部颗粒较粗。当面饰 9 瓣莲花，莲瓣形体瘦削而扁平，个别莲瓣中部有出筋现象；莲瓣之间分隔线顶端作三尖莲蕾形，其三尖边缘呈弧形；中央莲蓬稍突起，莲蓬上饰 6 颗莲子（中 1 边 5）。莲花与边轮之间饰一道凸弦纹。当背凹凸不平，当背与筒瓦连接处痕迹明显，且两端有手指的按痕。时代为南朝早期。边轮宽 1.1、高 0.8 厘米，当心径 2.4 厘米，厚 2.4 厘米。（图四，2）

8、标本十七（Ⅰ区 T405②:29） 灰陶质。高边轮，边轮多残；质地较疏松，内部颗粒较粗；当面饰 8 瓣莲花，莲瓣形体瘦削；莲瓣周边有一道凸起的轮廓线，莲瓣之间分隔线若有若无，顶端作倒弧边三角形图案，其边缘平直；中央莲蓬不凸起，莲蓬周围有一道凸弦纹，莲蓬上饰 6 颗莲子（中 1 边 5）。莲花与边轮之间饰二道凸弦纹，弦纹之间有一圈联珠纹，共 29 颗。当背凹凸不平，中央部位凸起；有旋坯纹，当背与筒瓦连接处痕迹明显，且两端有手指的按痕。时代为隋、唐时期。当径 15.8 厘米，边轮宽 1.1、高 1.1 厘米，当心径 3.5 厘米，厚 2.6 厘米。（图四，5）

9、标本十八（Ⅱ区 ATG1:6） 青灰陶质。高边轮，边轮残大部分；质地较疏松，内部颗粒较粗；当面饰 9 瓣莲花，排列较紧密，莲瓣形体短而饱满；莲瓣之间分隔线若有若无，顶端作倒弧边三角形图案，其边缘平直；中央莲蓬不凸起，莲蓬周围有一道凸弦纹，莲蓬上饰 5 颗莲子（中 1 边 4），中间一颗较大。莲花与边轮之间饰一道凸弦纹，弦纹与边轮之间有一圈联珠纹。当背凹凸不平，有旋坯纹，当背与筒瓦连接处痕迹明显，且两端有手指的按痕。时代为隋、唐时期。当径 14.8 厘米，边轮宽 1.3、高 0.8 厘米，当心径 1.9 厘米，厚约 2.5 厘米。（图四，6）

10、标本十九（Ⅱ区 ATG2:8） 灰陶质。做工较好，高边轮；质地较紧密，内部颗粒较细；当面饰 11 瓣莲花，莲瓣形体瘦削；莲瓣顶端作倒弧边三角形图案，其边缘平直；中央莲蓬稍凸起，莲蓬周围有一道凸弦纹，莲蓬上饰 16 颗莲子，分 3 圈布置（中 1 边 5、10）。莲花与边轮之间无

凸弦纹，莲瓣与边轮之间有一圈较细小的联珠纹。当背凹凸不平，有旋坯纹，当背与筒瓦连接处痕迹明显，且两端有手指的按痕。时代为隋、唐时期。当径 15.6 厘米，边轮宽 1.6-2.0、高 0.9 厘米，当心径 4.0 厘米，厚 2.6 厘米。（图五，1）

11、标本二十（Ⅰ区 T303②:15） 残大部分。灰黑陶质。高边轮。质地较疏松，内部颗粒较粗；当面原饰 8 瓣莲花，现剩 6 瓣莲花，莲瓣形体饱满；莲瓣周边有一道凸起的轮廓线，莲瓣之间分隔线若有若无，顶端作倒弧边三角形图案，其边缘平直；中央莲蓬不凸起，莲蓬周围有一道凹弦纹，莲蓬上饰 7 颗莲子（中 1 边 6）。莲花与边轮之间饰一道凸弦纹，弦纹之间有一圈联珠纹。当背凹凸不平，有旋坯纹，当背与筒瓦连接处痕迹明显，且两端有手指的按痕。时代为隋、唐时期。边轮宽 1.3、高 0.8 厘米，当心径 3.8 厘米。（图五，2）

12、标本二十一（1 号平台 TG5:14） 稍残。灰陶质。高边轮；质地较疏松，内部颗粒较粗；当面饰 8 瓣莲花，莲瓣形体瘦削；莲瓣周边有一道凸起的轮廓线，莲瓣顶端作倒弧边三角形图案，其边缘平直；中央莲蓬凸起，莲蓬上饰 7 颗莲子（中 1 边 6）。莲花与边轮之间无凸弦纹，莲瓣与边轮之间有一圈联珠纹。当背凹凸不平，中央凸起；当背与筒瓦连接处痕迹明显，且两端有手指的按痕。时代为隋、唐时期。当径 14.4 厘米，边轮宽 1.2、高 1.2 厘米，当心径 3.2 厘米，厚 2.6 厘米。（图五，4）

（二）筒瓦

1、标本一（Ⅰ区 T304③:10） 残。灰黄陶质，质地较紧密，内部颗粒细小。器形较小。短唇，前端圆润呈半圆形，筒身拱度较大，表面光滑；内有麻布纹，唇部与筒身连接处（内）粘连痕迹明显；时代为南朝早、中期。长 20.5、宽 11.8、高 6.6、唇长 2.5、厚 1.2 厘米。

2、标本四（Ⅰ区 T405③:4） 唇部全残。灰陶质。筒体特征基本同上。时代为南朝早、中期。唯筒身中部有近似圆形钉孔，孔直径约 1 厘米。残长 14、残宽 12.5、厚 1.5 厘米。

3、标本五（Ⅰ区 T302③:17） 稍残。青灰陶质。器形较厚重。大小头的长唇前端齐平，筒身拱度较小，表面有抹刮痕，内印麻布纹。唇部与筒身连接处（内）修抹光滑。时代为南朝早、中期。总长 35.6、宽 16、高 6.2 厘米，唇长 5.2、厚 2.1 厘米。

（三）板瓦

1、标本二（Ⅰ区 T302③:4） 残。青灰陶质，质地较细密，内部颗粒细小；表面素面，表面下（宽）端部有一道横向浅凹槽，板瓦表面中部有纵向刮压痕；内面上（窄）部有一组二道横向凹点（10 个），上部也残留几个凹点；通体有细麻布纹。两侧面有超过瓦体厚度一半的切割痕。时代为南朝早、中期。残长 30、残宽 15、厚 1.1-1.2 厘米。（图六，5）

2、标本四（Ⅰ区 T405③:10） 残。青灰陶质，质地较细密；表面下端部有横向刮压痕，通体有麻布纹，内面下端部有一道宽边线，侧面有切割痕。时代为南朝早、中期。长 21、残宽 17、厚 1.5-1.7 厘米。

（四）花头板瓦（滴水瓦）

1、标本一（Ⅰ区 T405②:2） 残。青灰陶质，质地疏松，内部颗粒较粗。端面中部有一道

粗凸弦纹，凸弦纹上部有粗短斜纹，其端面上部与板瓦表面齐平；端面下部饰波浪纹，为手工捏制而成。板瓦与端面连接处接痕明显。时代为隋、唐时期。残宽 19.4、高 3.5 厘米。（图六，3）

2、标本二（Ⅰ区 T203②:5） 残。青灰陶质，其基本特征同于标本一。时代为隋、唐时期。残宽 13.6、高 4.0 厘米。（图六，2）

3、标本三（1 号平台 TG11:10） 残。青灰陶质，做工粗糙；端面中部有一道粗凸弦饰，凸弦纹上部有粗短斜线纹，其端面上部与板瓦表面齐平；端面下部饰波浪纹，为手工捏制而成。板瓦与端面连接处接痕明显。时代为隋、唐时期。残宽 14.5、高 3.5 厘米。（图六，1）

4、标本四（Ⅰ区 T505②:4） 残。灰陶质，质地疏松，内部颗粒较粗；做工简单，端面中部有一道粗凸弦纹，凸弦纹上部有粗短斜纹，端面下部饰粗短斜纹。其端面上部高于板瓦表面；板瓦与端面连接处接痕明显。时代为隋、唐时期。残宽 19.4、高 3.5 厘米。（图六，4）

（五）钟山二号寺庙遗址出土瓦件的特点归纳如下：

1、钟山二号寺庙遗址出土南朝瓦当分莲花纹和兽面纹两类，其中又以莲花纹为主。唐朝地层中未出土兽面纹瓦当。

2、南朝时期莲花纹瓦当质地普遍较好。高边轮。当面莲花纹有 6、8、9、10 瓣之别。瓦当的制作工艺及其与筒瓦的粘接方式与钟山南朝坛类建筑遗存及萧伟墓阙遗址出土同类瓦当相似。但有部分瓦当的当背出现一种旋坯纹，我们过去在东吴时期的人面纹瓦当上发现过这种旋坯纹，而到南朝时期，这种工艺特点即较少出现，因此，这批南朝莲花纹瓦当在制作工艺上有一定的自身特点。

3、隋唐时期的莲纹瓦当在莲瓣周边多饰联珠纹，这种带联珠纹装饰的莲花纹瓦当，在南朝中后期已经出现（图六，7）。莲瓣中央的莲蓬一般不再凸起；莲瓣间的分隔线时隐时现，甚至基本不见，而仅留有瓣尖之间的倒三角形简化莲蕾纹。有的瓦当的当背与南朝瓦当一样仍有旋坯纹。瓦当与筒瓦端部粘连处的制作痕迹也保留了南朝的特点，这些都呈现出南京地区南朝至隋唐时期瓦当及筒瓦制作工艺的历史传承性。

4、本遗址南朝时期筒瓦、板瓦的制作工艺与上述两处遗址出土筒瓦制作工艺大体相同。

5、隋唐地层出现花头板瓦，即用于檐口部位的滴水瓦，花头下部作波浪纹式，为手工捏制而成，工艺的时代特征明显。这类花头板瓦在南朝台城宫殿区也有发现（图六，8）。

四、南京城区三山街南朝“明堂”砖发现地出土瓦

南京城区三山街南朝“明堂”砖出土地发现于 2006 年 5 月^{〔17〕}，这批标本系采集所得，包括瓦当和铭纹砖等，现将其中部分资料介绍如下：

（一）瓦当

1、标本一（NSSJ:4） 稍残。灰陶质。高边轮，质地较疏松，内部颗粒较粗；当面饰复瓣莲花，瓣体低平，瓣尖翘起；莲花中央有一道凸起线条，该线条把莲瓣分成两份，其中各有一小莲瓣；莲瓣之间无分隔线，顶端作一小三角形，边缘较平直；中央莲蓬已剥蚀，莲花与边轮之间

无弦纹，且莲花和边轮之间留空较大。当背凹凸不平，有旋坯纹，当背与筒瓦连接处有泥片附加痕迹，且两端有手指的按痕。时代为南朝早中期。当径 13.0 厘米，边轮上窄下宽，呈梯形，上宽 1.0-1.2（下宽 1.3-1.5）、高 0.8 厘米，厚 2.5 厘米。（图七，1）

2、标本二（NSSJ:3） 残。灰黑陶质。质地较紧密，颗粒较细；高边轮且宽大，当面原饰 10 瓣莲花，现剩 8 瓣，莲瓣边缘线条柔和，莲瓣形体短小且饱满；莲瓣中部有出筋现象，莲瓣之间分隔线较为清晰，其顶端作三叉形，其边缘稍呈弧形。中央莲蓬稍凸起，当心径大，莲蓬上饰 7 颗莲子（中 1 边 6）。莲花与边轮之间饰一道凸弦纹。当背凹凸不平，做工一般，当背与筒瓦连接处痕迹被抹平，但两端有手指的按痕。时代为南朝早期。当径 15.6 厘米，边轮宽 2、高 1.4 厘米，当心径 2.5 厘米。（图七，2）

3、标本三（NSSJ:采 15） 残。灰陶质。高边轮，质地较疏松，内部颗粒较粗；当面饰 9 瓣莲花，莲瓣模糊，莲瓣形体饱满，莲瓣中部有出筋现象；莲瓣之间分隔线较细，顶端作三尖莲蕾形，其三尖边缘呈弧形；中央莲蓬稍凸起，中心内凹，莲蓬周围饰 8 颗莲子，中间莲子已残，有一圆形的洞；莲蓬周围有细而短放射纹。莲花与边轮之间无弦纹。当背较光滑。时代为南朝早期。当径 14.7 厘米，边轮宽 1.2、高 0.9 厘米，当心径 3.4 厘米（图七，3）。

4、标本四（NSSJ:5） 稍残。灰陶质。高边轮，质地较疏松，内部颗粒较粗；当面饰 8 瓣莲花，莲瓣线条刚直，莲瓣形体扁平瘦削，莲瓣中部有出筋现象；莲瓣之间分隔线较细，顶端作细长“T”形，其边缘平直；中央莲蓬稍凸起，莲子模糊，莲蓬上饰 7 颗莲子（中 1 边 6）；莲花与边轮之间凸弦纹若有若无。当背凹凸不平，有旋坯纹，当背与筒瓦连接处的痕迹已被抹平，两端手指按痕也不明显。时代为南朝早期。当径 13.2 厘米，边轮宽 1-1.2、高 0.8 厘米，当心径 3.0 厘米。（图七，4）

5、标本五（NSSJ:2） 灰陶质。高边轮，边轮残大半，质地较疏松，内部颗粒较粗；当面饰 8 瓣莲花，莲瓣形体饱满，莲瓣中部有出筋现象；莲瓣之间分隔线较清晰，顶端作三尖莲蕾形，其三尖边缘呈弧形；中央莲蓬稍凸起，中心内凹，莲蓬上饰 8 颗莲子（中 1 边 7）。莲花与边轮之间饰一道凸弦纹。当背较光滑，当背与筒瓦连接处痕迹明显。时代为南朝早期。当径 14.2 厘米，边轮宽 1.3、高 1.0 厘米，当心径 3.6 厘米。（图八，1）

6、标本六（NSSJ:6） 灰陶质。高边轮，质地较紧密，内部颗粒较细；当面饰 8 瓣莲花，莲瓣线条刚直，莲瓣形体中部较尖且饱满；莲瓣之间分隔线较清晰，顶端作肥大的倒弧边三角形，其边缘呈弧形，莲瓣顶部与分隔线顶端紧靠边轮；中央莲蓬稍凸起，中心内凹，莲蓬上饰 7 颗莲子（中 1 边 6）；莲花与边轮之间无弦纹。当背较平整、光滑，当背与筒瓦连接处的痕迹已被抹平，两端手指按痕也不明显。时代为南朝早期。当径 13.4 厘米，边轮宽 1-1.3、高 0.9 厘米，当心径 2.5 厘米，厚 3 厘米。（图八，2）

7、标本七（NSSJ:采 13） 灰陶质。高边轮，质地较紧密，内部颗粒较细；当面饰 8 瓣莲花，莲瓣形体饱满；莲瓣的顶部都饰一箭头状小三角形纹；莲瓣之间分隔线较清晰，顶端也作箭头状小三角形，其边缘呈弧形；中央莲蓬稍凸起，中心内凹，莲蓬上饰 7 颗莲子（中 1 边 6）；莲花与

边轮之间无弦纹。当背较平整，当背有浅浅的刮削痕。当背与筒瓦连接处的痕迹较明显，两端手指按痕较浅。时代为南朝早期。当径 11.4 厘米，边轮宽 1、高 0.9 厘米，当心径 2.1 厘米。（图八，3）

8、标本八（NSSJ:采 16） 残半。灰陶质。高边轮，质地较紧密，内部颗粒较细；当面饰 8 瓣莲花，莲瓣形体短小且扁平，莲瓣中部有出筋现象；莲瓣之间分隔线若有若无，顶端作三尖莲蕾形，其边缘呈弧形；中央莲蓬稍凸起，中心内凹，莲蓬上饰 7 颗莲子（中 1 边 6）；莲花与边轮之间凸弦纹若有若无。当背凹凸不平，有旋坯纹，当背与筒瓦端部连接处的痕迹较明显，两端手指按痕较深。时代为南朝早期。当径 9.2 厘米，边轮宽 0.8、高 0.7 厘米，当心径 2.0 厘米。（图八，4）

9、标本九（南京城区采集:2） 当面稍残。灰陶质。高边轮，质地较疏松，内部颗粒较粗；当面饰 8 瓣莲花，现仅剩 5 瓣，莲瓣形体饱满，莲瓣中部有出筋现象；莲瓣之间分隔线已全无，顶端作三尖莲蕾形，其边缘较平直；中央莲蓬凸起，中心内凹，莲蓬上饰 7 颗莲子（中 1 边 6）；莲花与边轮之间凸弦纹若有若无。当背较光滑，当背与筒瓦端部连接处有附加泥片的痕迹，且两侧有手指按痕。当径 13.2 厘米，边轮宽 1.3、高 1.1 厘米，当心径 2.6 厘米。当背后所接筒瓦完好，筒瓦表面素面，短唇，唇部圆润，唇部与筒瓦连接处（表面）较陡直，表面圆润光滑，筒瓦表面中部有一近似圆形的钉洞（直径约 1.1 厘米），筒瓦表面上部与当面连接处下凹；唇部与筒瓦身粘接处（内）明显。内面有细小的麻布纹，且内面凹凸不平，时代为南朝时期。长 20.5、宽 12.3、高 4.8 厘米，唇长 2.5 厘米，筒瓦厚 1.0-1.8 厘米。（图六，6）

（二）南京城区三山街“明堂”砖地点出土瓦特点：

1、该地点出土的绳纹砖之端面模印“大明三年明堂壁”六字（图八，5、6），表明这一带曾是《宋书》、《南史》等史书明确记载的南朝刘宋孝武帝大明三年所建“明堂”的地点。

2、出现数量很少的复瓣莲花纹瓦当，用这种复瓣莲花图案装饰瓦当工艺，过去所知主要流行于北魏平城和北魏洛阳两座都城。当然，南朝复瓣莲纹瓦当与北朝的同类瓦当仍有一定的差异，如南朝为高边轮，边轮较窄，且当面低于边轮；北朝为低边轮，边轮较宽，当面一般要高于边轮；北朝的复瓣莲纹有较强的立体雕塑感等。

3、不少瓦当当背有旋坯纹，与钟山二号寺庙遗址出土的部分南朝瓦当制作工艺类似。

4、筒瓦的工艺特点及筒瓦端部与瓦当的粘接工艺和钟山南朝坛类建筑遗存等出土南朝同类瓦件特点相似。

五、南京附近安徽境内窑址出土资料

近年来，在做六朝瓦当研究的过程中，我们一直想寻找到瓦当的烧制地点。1997 年，在南京南郊某建筑工地曾有六朝窑址和部分瓦件材料的发现，可惜，待我们到现场后，窑址遗存已基本被破坏，从残留窑床可以发现，是平面略呈椭圆形的馒头窑型，在现场仅采集到少量瓦件标本。2001 年，经广泛调查，我们在距南京不远的安徽省境内终于发现了一处占地面积较大的古代窑址

群，其中有不少是南朝时代的窑室遗迹，部分窑室残基内还保留着草木灰、残瓦当、板瓦和筒瓦等。本文介绍的是我们在调查中根据发现的窑址之先后所编的4号窑与6号窑中分别出土的2件瓦当。

1、标本一（ADY:W1） 灰陶质。质地较疏松，颗粒较粗；边轮残半，当面饰8瓣莲花，莲瓣形体瘦小且饱满；莲瓣之间分隔线较粗且清晰，其顶端作“T”形，其边缘平直，在T形之间，莲瓣的顶部都饰一乳钉；中央莲蓬不凸起，莲蓬边缘为一圈凸弦纹，莲蓬上饰7颗莲子（中1边6）。莲花与边轮之间无凸弦纹。当背平滑，做工较好，当背与筒瓦连接处有附加泥片痕迹，且两端有手指的按痕。时代为南朝中、晚期。当径14.6厘米，边轮宽1.2-1.7、高0.4厘米，当心径3.6厘米，厚约1.6厘米（图三，4）。

2、标本二（ADY:W2） 残。灰黑陶质。质地较疏松，颗粒较粗；当面仅剩2瓣莲花，莲瓣形体瘦长；莲瓣之间分隔线较粗且清晰，其顶端作“T”形；中央莲蓬全残，莲花与边轮之间无凸弦纹。当背凹凸不平，做工粗糙，时代为南朝晚期。边轮宽1-1.6、高0.4厘米（图三，5）。

以上两件瓦当的当面装饰纹样、制作工艺等与南京市出土的南朝瓦当风格基本一致，为此，我们认为该窑址很可能就是南朝时期隶属于都城建康的砖瓦烧制工场的遗存。

六、小 结

总之，根据我们目前所获南朝瓦件资料，我们大体了解到有关南朝时期都城瓦件的工艺特征：

其一，南朝时期的瓦当都是高边轮，且当面都低于边轮；当面为单独模制而成，然后再附加边轮；瓦当与筒瓦端部的粘接处内部都附加泥片，并予抹平，在附加泥片的两侧常留下较深的指按痕。部分瓦当的当背有旋坯纹，这一工艺特点传承自东吴、西晋时期，并在隋唐时期仍有使用。

其二，南朝时期的筒瓦表面为素面，常有制作工具留下的纵向刮压痕，这与东吴时期的表面拍压绳纹或拍印其他纹饰的筒瓦形成明显的工艺差异。筒瓦内面一般都有细麻布纹，表明筒瓦成型过程中内有包裹麻布的模具。从筒瓦侧面的切割痕判断，一般都是从内面切割，切割深度大约是瓦身厚度的1/2左右。从部分瓦件的制作痕迹上可以推断，当时存在着泥板法制瓦工艺。

其三，南朝时期的板瓦表面和内面特征及侧面切割工艺痕迹等与筒瓦相似，表明它们的制作工艺大体一致。

其四，南朝时期的瓦当与本地区隋唐时期的瓦当在制作工艺上有明显的传承关系，但瓦当的装饰纹样呈现出明显的时代差异。

其五，南朝时期可能存在不同功能的建筑物在用瓦上有一定差别的制度，即宫殿、不同性质的礼仪性建筑、陵寝、寺庙建筑等在用瓦上或有一定的制度差异，这种用瓦制度差异的细节特别是其工艺特点等还有待于进一步的研究。

其六，我们过去提出过，南朝以单瓣莲花为特点的瓦当“模式”曾给予北朝、百济国乃至古代日本同类莲花纹瓦当以一定的影响⁽²⁰⁾。不过，这仅是从瓦当的当面造型特点提出的观点，事实究竟如何，还要依靠技术细节的研究才能够得出更有说服力的结论。

总之，在 4—6 世纪约 300 年时间内，首先是在中国境内完成了从秦汉瓦当模式（以云纹为主）向隋唐瓦当模式（以莲花纹为主）的转型；继而实现了东亚地区各国对莲花纹瓦当模式及其他瓦类技术的普遍共享和各自又在细节上的创新，从而共同促进了东亚地区传统建筑文化体系的形成。这一时期，瓦当的使用还实现了从原先的限于宫殿、礼制建筑、陵寝、官署等向宗教建筑的推广，大大扩充了瓦当的使用范围。毫无疑问，对这一时期东亚地区瓦的类型、结构、造型、技术等问题的全面研究，有助于深入认识当时不同地区、不同民族之间的文化交流和人员互动，从而揭示出更多的鲜为人知的历史奥秘！

本文仅是我们根据有限的资料所做的初步的探讨，目的是希望借此获得与各位专家加强交流的机会。我们深信，只有不同国家和地区的学者共同合作，才能解决东亚地区许多有广泛意义的考古学学术问题，其中也包括我们目前感兴趣的“古代东亚地区造瓦技术变迁与传播的考古学研究”这样的课题。

文中不当之处，还祈诸位批评和谅解！

注 释

- (1) [日]村上和夫著，丛苍、晓陆译《中国古代瓦当纹样研究》第四章“魏晋南北朝至唐代”图 8 介绍的素瓣莲花纹瓦当，为 1949 年前出土于南京市报恩寺遗址，由日本东京大学文学部收藏。三秦出版社，1996 年出版。
- (2) 北京大学考古系所编讲义《魏晋南北朝考古》第 38 页中介绍了出土于南京清凉山地区的几件南朝时期的莲花纹瓦当和兽面纹瓦当。1974 年内部印行。
- (3) 李科友等《江西九江县发现六朝寻阳城址》，《考古》1987 年第 7 期。该地点出土了南朝莲花纹瓦当，但详细资料未予公布。
- (4) 成都市文物考古工作队等《成都市西安路南朝石刻造像清理简报》，《文物》1998 年 11 期。简报中公布了该地点与石造像共出的一件莲花纹瓦当。又张肖马等《成都市商业街南朝石刻造像》，《文物》2001 年第 10 期。简报公布了该地点出土的 3 件南朝莲花纹和花草纹瓦当。
- (5) 刘建国先生在 20 世纪 90 年代于镇江城市考古中发现一批南朝时期的莲花纹瓦当，笔者在 1994—1995 年往镇江作考古调查时得以多次观摩，这批材料后由刘建国先生等整理并陆续发表，见镇江古城考古所《江苏镇江市出土的古代瓦当》，《考古》2005 年第 3 期；刘建国、潘美云《论六朝瓦当》，《考古》2005 年第 3 期。
- (6) 南京市博物馆等《江苏南京市富贵山六朝墓地发掘简报》，《考古》1998 年第 8 期。该墓地发现了一件南朝早期的莲花纹瓦当。又贺云翱、邵磊等《南京首次发现六朝大型坛类建筑遗存》，《中国文物报》1999 年 9 月 8 日一版。该文介绍了本次发掘中发现的一批南朝早期莲花纹瓦当。
- (7) 李灶新《南越国宫署遗址 2000 年发掘出土瓦当研究》，载《华南考古》，文物出版社，2004 年 4 月。该文公布了 2000 年于广州出土的一批东晋晚期至南朝时期的莲花纹瓦当。
- (8) 刘尊志《徐州出土晋代记事碑及相关问题略考》，《中原文物》2004 年第 2 期。文中报道了徐城市区金地商都遗址出土的一批南朝时期的莲花纹及兽面纹瓦当。
- (9) 拙作《六朝瓦当初探》，载《六朝文化国际学术研讨会论文摘要》，东南文化杂志社印行，1998 年。
- (10) 贺云翱、邵磊《南京出土南朝椽头装饰瓦件》，《文物》2001 年 8 期；南京市文物研究所等（贺云翱、邵磊执笔）《南京梁南平王萧伟墓阙发掘简报》，《文物》2002 年 7 期；拙文《南京出土六朝瓦当初探》，《东南文化》2003 年 1 期；南京市文物研究所等（贺云翱执笔）《南京钟山南朝坛类建筑遗存一号坛发掘简报》，《文物》2003 年 7 期；拙文《南京出土六朝兽面纹瓦当再探》，《考古与文物》2004 年 4 期；拙文《南朝都城建康莲花纹瓦当的变迁及相关问题研究》，载《百济汉城期物流系统和对外交流》，韩国韩神大学主编，2004

年7月出版；贺云翱、邵磊《南京毗卢寺东出土的六朝时代瓷器和瓦当》，《东南文化》2004年6期；拙作《南京钟山二号寺遗址出土瓦当初探》，韩国忠清文化财研究院《东亚考古论坛》创刊号，2005年；贺云翱、路侃《南京发现南朝“明堂”砖及其学术意义初探》，《东南文化》2006年4期等。

另参见拙著《六朝瓦当与六朝都城》，文物出版社，2005年出版。

- (11) 王志高、贾维勇《六朝瓦当的发现及初步研究》，《东南文化》2004年第4期。
- (12) 本文所使用的拓片，均为中日学者组成的“古代东亚地区造瓦技术变迁与传播”课题组在宁考察时所摹拓，摹拓工作主要是由日方学者所完成，在此特予说明并表示衷心感谢！
- (13) 南京市文物研究所、中山陵园管理局文物处、南京大学历史系（贺云翱执笔）《南京钟山南朝坛类建筑遗存一号坛发掘简报》，《文物》2003年7期；贺云翱《发现最早的地坛遗存——南京钟山六朝坛类建筑遗存》，载《中国年度十大考古新发现（2000年卷）》，三联书店，2005年12月。
- (14) 2008年3月26日在北京举行的“古代东亚地区制瓦技术变迁与传播研究国际学术研讨会”上，日本学者佐川正敏先生、山崎信二先生都对“泥板成型”制瓦技术作了研究报告，本人受益良多，在此特表感谢！
- (15) 南京市文物研究所、南京栖霞区文化局（贺云翱、邵磊执笔）《南京梁南平王萧伟墓阙发掘简报》，《文物》2002年7期；朱光亚、贺云翱、刘巍《南京梁萧伟墓墓阙原状研究》，《文物》2003年5期。
- (16) 贺云翱《南京钟山二号寺遗址出土瓦当初探》，载韩国忠清文化财研究院，《东亚考古论坛》创刊号，2005年；贺云翱《南京钟山二号寺遗址出土南朝瓦当与南朝上定林关系研究》，《考古与文物》2007年1期。
- (17) 贺云翱、路侃《南京发现南朝“明堂”砖及其学术意义初探》，《东南文化》2006年4期。
- (18) 贺云翱、邵磊《南京出土南朝椽头装饰瓦件》，《文物》2001年8期。
- (19) 拙作《六朝椽当的初步研究》，《文物》2009年待刊。
- (20) 贺云翱《南朝都城建康莲花纹瓦当的变迁及相关问题研究》，载《汉城期百济物流系统和对外交流》，韩国韩神大学主编，2004年出版；另参见拙作《六朝瓦当与六朝都城》有关章节。